



巻 頭 言

福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校 校長 柳沼英樹

東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故から11年が過ぎた。この未曾有の複合災害直後の壊滅的とも言える状況に比べれば、私たちを取り巻く環境は、避難指示が徐々に解除されたり、学校が元の場所で再開したり、食べ物を安心して食べることができたり、町にも賑わいが見られるようになっていたり、一步一步着実に復興の歩みを進めているように思える。その一方で、未だにふるさとを離れた生活を余儀なくされている方々が3万人を超える状況であり、双葉郡をはじめ福島で生きる私たちは、否応なく次のような課題に向き合っていかなければならない。

第一に、全国の地域が直面する課題である。双葉郡、福島県では、日本のあらゆる地域が直面している、少子高齢化、過疎化の急激な進行などの課題が、震災と原発事故により先鋭化しており、いわば「課題先進地域」となっている。第二に、原発事故特有の課題である。故郷を汚染され、帰りたくても帰ることができないという現実。長期にわたる避難生活。差別と偏見。コミュニティ内での対立と分断。第三に、以上の課題は、同時にグローバルな課題として私たちの前にある。例えば、2030年に向け国際社会が合意して取り組んでいる『持続可能な開発のための目標』である、「貧困をなくそう」「すべての人に健康と福祉を」「安全な水を」「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」「住み続けられるまちづくり」「海や陸の豊かさを守ろう」「平和と公正をすべての人に」など、これらのグローバルな課題は、この双葉郡、福島県においては、今、目の前にある危機に他ならない。

このような中、私たちは、これまでの価値観、社会のあり方を根本から見直し、持続可能な循環型社会の実現、自立した新たなコミュニティ・まちづくり、再生可能なエネルギー社会の実現など、新しい生き方、社会の建設を目指し、変革を起こしていくことが求められている。

このミッションに応えるチャレンジが、昨年度から文部科学省より「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の指定を受けて取り組んできた研究開発である。これは、本校がSGH（スーパーグローバルハイスクール）の指定を受け行ってきた研究の成果を分析しつつ、さらに取組を発展させることを目的としている。特に、県・学校・双葉郡8町村・高等教育機関・地域関係者によるコンソーシアム協議会を組織し、様々な意見をいただきながら、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を推進してきた。生徒たちは、コロナ禍の中、人との接触が制限されたり、今までに無かった配慮が求められる状況にあっても、たくましく、前向きに探究を深め、役場や商店、病院、企業などを訪問して出会った、解が見えないような困難な課題を題材とした対話劇を創作し上演することにより、演者や聴衆など、多面的な視点から物事を見つめ、協働性、寛容性などコミュニケーション力や本質をつかむ力を身につけた。

さらに、海外研修に代えて実施した、プリティッシュヒルズでの合宿研修、留学生向けの双葉郡スタディツアーの企画・実践及びYouth Delegatesとのオンライン対話などを通して、現代の世界が直面している抜き差しならない課題と向き合い、OECD諸国を

はじめとした国々で共通して重要と認められている普遍的な「共通価値」と邂逅し、否応なく、これまでの価値観、社会のあり方を根本から見直し、持続可能な循環型社会の実現に向けた課題意識を深めた。加えて、地域の課題を解決する100を超えるプロジェクトを自分たちの力で立ち上げ、地域の様々な主体と協働しながら実践を積み重ねてきた。

このような、企業、行政、NPO、研究機関など多様な主体との「対話と協働」を通して、生徒たちは、失われた故郷を取り戻し自分たちで新たに創造していこうとする意志、困難な状況にあるからこそ可能なことを構想する力を身につけ、困難を乗り越え、夢に向かって着実に前進している。

これまでの取組を継承するだけでなく、学校と地域がさらに連携を深め、生徒の探究が、学びと地域復興の相乗効果の創出につながるとともに、探究を通じて地域住民主体のウエルビーイング実現を後押しできるよう、今後も取組を推進していきたい。

結びに、私たちの挑戦を支えていただいたすべての方々に深く感謝申し上げるとともに、多くの困難を乗り越えてきた生徒たちと彼らを導いてくれた教職員に敬意を表する。

目 次

巻頭言	
第1章	研究開発概要 1
第2章	研究開発の内容・活動実績
2.1	地域創造と人間生活（1年次） 19
2.2	未来創造探究（2年次） 29
2.3	未来創造探究（3年次） 44
2.4	海外研修・国内研修 62
2.5	発表・交流 70
2.6	社会起業部の活動 75
第3章	カリキュラム・マネジメント
3.1	探究活動の指導方Ⅰ 79
3.2	探究活動の指導方Ⅱ 83
3.3	外部連携 89
3.4	外部連携実績 92
3.5	未来研究会 98
第4章	ICTの活用
4.1	経緯 101
4.2	内容 101
4.3	考察 104
4.4	今後の展望 104
第5章	実施の効果とその評価
5.1	ルーブリック評価 105
5.2	ルーブリック評価の定量的分析 （アクセンチュア株式会社） 110
5.3	5期生の個別評価 112
5.4	3年間を通じた各取組に関する評価 116
5.5	進路や在り方生き方への影響に関する評価 117
5.6	学校アンケートによる評価 118
5.7	設定した目標の達成度 119
第6章	研究開発の成果と課題
6.1	研究開発の成果 123
6.2	課題と今後の方向 125
関係資料	資料1 教育課程表 127
	資料2 ルーブリック表 129
	資料3 令和3年度 コンソーシアム協議会記録 130
	資料4 令和3年度 グローカル型運営指導委員会記録 132
	資料5 5期生未来創造探研究生徒研究発表会テーマ一覧 136
	資料6 6期生プレ発表会テーマ一覧 141
	資料7 その他 報道抜粋 147

令和2年度指定
地域との協働による高等学校教育改革推進事業
【グローバル型】
研究開発実施報告書
第2年次

令和4年3月31日

編集・発行 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
校長名 柳沼英樹
住所 〒979-0408
福島県双葉郡広野町中央台1丁目6番地3
電話番号 0240-23-6825
FAX番号 0240-23-6828

印刷・製本 八幡印刷株式会社
住所 〒970-8026
福島県いわき市平字田町82-13
電話番号 0246-23-1471
FAX番号 0246-23-1473

1. 1 研究開発概要（事業構想）

1 教育目標

① 管理機関における教育目標

ふたば未来学園中学校・高等学校は東日本大震災、福島第一原子力発電所の事故を受け、福島県双葉郡に平成 27 年に高等学校、平成 31 年に中学校が開校した。現在、双葉郡では原発の廃炉、地域コミュニティの再生、風評との闘いなど地域を分断する困難な課題が山積している。世界と協働しながらこれからの復興・地方創生を進めていく人材の育成が、この地域にとって喫緊の課題である。このため、グローバルな課題である原子力災害からの復興をテーマとして設定し、地域との協働による地域の課題解決に向けた探究・実践と海外研修を体系的に位置づけたカリキュラムを開発する。

② 学校の教育目標

本校は震災と原発事故により休校となった 5 校の伝統を引き継ぎ開校した。世界が経験したことのない困難な課題に直面した本地域の課題は、極端な少子高齢化や人口減少が進行する未来の全国の地域や、異なる立場や価値観を排斥する世界の分断と重なり合っている。本校は、こうした地域と世界の課題解決に貢献する人材を育成し、全国の学校や地域の変革を牽引する強い決意のもと、「新しい生き方、新しい社会の建設を目指し、地域や社会を舞台にして、これまでの価値観、社会のあり方と根本から見直し、自らを変革し、地域を変革し、社会を変革する『変革者』を育成する。」 【補足 1】

【補足 1】学校概要

東日本大震災及び福島第一原子力発電所の事故は、福島県、特に双葉郡とその近隣市町村に深刻な影響をもたらした。地域住民の避難が長期化するなか、教育環境の整備と震災を踏まえた諸課題に対応できる人材育成のため、「福島県双葉郡教育復興ビジョン」のもと、本校は平成 27 年 4 月に新設された。

本校は、募集停止となった双葉郡内の 5 つの高等学校の歴史と伝統、教育内容や特色を踏まえた幅広い学びを可能とした総合学科高校として、以下の 3 つの系列の科目群を設けている。

- ◇「アカデミック」系列：大学等上級学校に進学するために必要とされる主要教科を中心とした科目群
- ◇「トップアスリート」系列： トップアスリートや生涯スポーツ社会のリーダーとして活躍することを目指し、バドミントン、サッカー、野球、レスリングで高度な技術・理論を習得することを目的とした科目群
- ◇「スペシャリスト」系列：農業、工業、商業、福祉の分野において地域を支える職業人として将来活躍するために必要な知識・技能を習得することを目的とした科目群

本校はふたば未来学園中学校も併設している。中学校は 6 年間を通した最先端のカリキュラムの中で、主体的・対話的で深い学び、グローバル教育、シティズンシップ教育の 3 つを中高一貫教育の柱に掲げ平成 31 年 4 月に開校した。

平成 27 年の開校当初、校舎は、広野町の本校舎、猪苗代町の猪苗代校舎（「トップアスリート」系列バドミントン生徒が在籍）、静岡県三島市の三島長陵校舎（JFA（日本サッカー協会）アカデミー福島生徒が在籍）の 3 つに分かれていた。平成 31 年 4 月に中学校が併設されると同時に広野町に新校舎が完成し、猪苗代校舎は閉鎖となった。現在は本校舎と三島長陵校舎の 2 校舎に生徒が在籍している。

在籍生徒数 (令和 4 年 1 月)	中学 1 年	中学 2 年	中学 3 年	中学 合計	高校 1 年	高校 2 年	高校 3 年	高校 合計
本校舎（広野町）	60	60	57	177	98	125	118	341
三島長陵校舎	-	-	-	-	22	20	20	62

2 構想の目的等

① 構想の目的

「原子力災害からの復興を果たすグローバル・リーダーの育成」として、これまで SGH で行ってきた研究成果の分析を生かしつつ発展させ、目的として以下を設定する。【補足 2】

- A 地域での課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成し、自己の在り方生き方を見出すカリキュラムの開発
- B 原子力災害特有の課題に加え、全国・世界の課題が先行して生じている地域の特性を理解し、新たなコミュニティや産業を創造し、課題解決に貢献する人材の育成
- C 双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果の創出、及び全国の高校への波及

【補足 2】 構想の目的と背景、求める地域人材

本校は平成 27 年の開校と同時にスーパーグローバルハイスクール (SGH) に指定され、「原子力災害からの復興を果たすグローバル・リーダーの育成」という構想のもと、これまで 5 年間研究開発を行ってきた。東日本大震災、福島第一原子力発電所事故が起きた地域に立地していることから、原子力災害からの地域復興に関する様々な活動を行ってきた。また通常教科・科目においてはアクティブラーニングの手法を積極的に導入し、グループワークやディスカッションなど生徒の主体的な取組を導入してきた。開校当初から SGH 指定となり、学校文化を作りながら研究開発も同時に進め、これまで以下のような成果が得られた。

- 「総合的な学習の時間」において地域の課題に向き合う活動を行い、課題の発見、課題の解決に向けた取組を学校全体で推進するような学校文化が形成された。
 - 本校の教育活動全体で育成すべき資質能力をまとめたルーブリックを作成し、これに基づいて評価を行うシステムの礎ができた。
 - 海外との連携先として、ドイツ、ニューヨークを選定し、現地の同世代の生徒と交流する場の形成、世界の課題を捉える取組づくりをすることができた。
- 一方で、以下の点が課題として明らかになってきた。
- 「総合的な学習の時間」は 2 年生から始まり、探究活動という視点からは 1 年生での取組が手薄となっている。1 年生では、関連する教科・科目として「地域創造と人間生活」を履修している。ここでは学習指導要領に基づき職業観の育成や進路選択等を行い、さらに表現力育成のための演劇等を取り入れているものの、探究的な視点が欠けており、課題があった。
 - 探究活動における教員の指導方法について整理されておらず、教員個人の力量に任される部分が多かった。研究開発校として汎用的な指導法の開発を目指してきたところであるが、現在も道半ばである。
 - 海外研修について試行錯誤をしながら実りのある研修先や研修方法について検討してきたが、地域と世界の関係を深く考察するまでには至らなかった。
 - 福島県双葉郡復興ビジョンのもと、地域との緊密な連携を行いながら教育を行ってきたが、これまでには学校の開校が重視され、広域の地域連携については課題があった。

上記のような課題も踏まえ、また地域課題の解決に向けてさらに発展的な取組を加え、今回、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」(グローバル型)に申請することとした。構想の目的として、以降に示す達成目標と紐づけて、以下の 3 点を設定した。

- A 地域での課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成し、在り方生き方を見出すカリキュラムの開発 (3 年間を通して切れ目なく地域探究活動に取り組むカリキュラム、また地域課題とグローバル課題を効果的に往還するカリキュラムに関する研究開発)
- B 原子力災害特有の課題に加え、全国・世界の課題が先行して生じている地域の特性を理解し、新たなコミュニティや産業を創造し、課題解決に貢献する人材の育成 (調査研究ではなく、真の意味で

の課題解決に向けた実践を行うことのできる人材の育成を特に重視。また定量的評価に基づいた目標の設定を実施。）

- C 双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果の創出、及び全国の高校への波及（学校と地域の協働による、学びと地域活性化の相乗効果を創出、高校での探究活動を核とした学校文化と新たな地域の創造、探究活動における生徒と教員の関わり方に関する提案などを実施。）

② 求める地域人材像

本校は双葉地区教育長会が中心となってまとめた「福島県双葉郡教育復興ビジョン（25年7月）」が建学の礎となっており、同ビジョンにおいて地域が提起した求める人材像を踏まえつつ、本校開校後にルーブリックで人材像を具体化してきた。今後本ルーブリックを地域とのコンソーシアムにおいて主に下記の視点を重視し改訂していく。 【巻末のルーブリック参照】

- 地域や世界の課題と自己の将来の夢とを重ね合わせ、当事者として行動する市民性
- 立場・価値観の違いによる深刻な分断や対立を止揚する、協働的ネットワーク構築力
- 地域の資源を見出した上で、知識や想像力を発揮し、地域に新たな価値を創造する力

3 達成目標（関連資料：「目標設定シート」）

① 定量的目標 ※卒業までに生徒に習得させる具体的能力を含む。

本構想の目的B、Cに関する達成の判断材料として、以下の定量的な目標を設定する。

- 本校では育成したい具体的な知識・スキル・人間性等をルーブリックにまとめ、10項目0（低）～5（高）のレベルで規定している。目標の最重要項目として「3年生最後のルーブリックレベル平均値で3.5以上」を掲げる。これまでレベル平均値は上がっているが、3.5という値は、挑戦的なレベルである。 【巻末のルーブリック参照】
- 地域社会への還流を見据え、地域に貢献していく在り方生き方の目標として「卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上」という項目を掲げる。
- その他、最終年度で「地域と協働した課題探究プロジェクト50件以上」「協働する地域の方延べ200件以上」「来校する教育関係者等250名以上」を目標とする。【補足3】

② 定性的目標 ※卒業までに生徒に習得させる具体的能力を含む。

本構想の目的Bに関する、生徒に習得させる具体的能力は①定量的目標記載の通り。

目的A、Cに関する達成の判断材料としては、以下の目標を設定する。 【補足3】

- 総合学科の入学年次必修科目「産業社会と人間」を学校設定科目「地域創造と人間生活（令和3年度より）」に代替し、困難な地域社会の現状とSociety5.0時代の変化を踏まえた能力と態度を養い自己の在り方生き方を見出すカリキュラムを開発する。
- 地域とグローバルな視点を重ね合わせた地域課題解決探究・学習モデルを構築する。
- 地域復興・創生における高校の役割と、「教育と復興の相乗効果創出」の必要性を踏まえ、双葉郡8町村との広域的・組織的・実働的な協働体制をコンソーシアムで確立し8町村を面的にカバーするとともに、地域協働の場・機会として校舎や探究発表会を活用し、生徒の探究を通じて地域住民主体のウェルビーイング実現を後押しする。

【補足3】 本構想の目的A、B、Cに紐づけて達成目標を以下の通り設定した。目的の内容を踏まえて、目的Aについては定性的目標を、目的Bについては定量的目標を、目標Cについては定量的目標と定性的目標を設定した。また定量的目標については関連資料：「目標設定シート」に記載した。

目的A「地域での課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成し、在り方生き方を見出すカリキュラムの開発」に対する目標

総合学科の入学年次必履修科目「産業社会と人間」を学校設定科目「地域創造と人間生活（令和3年度より）」に代替し、困難な地域社会の現状と Society5.0 時代の変化を踏まえた能力と態度を養い、在り方生き方を見出すカリキュラムを開発する。また、2, 3年次に履修する「総合的な探究の時間」において地域課題に向けた探究活動を行い、探究活動の効果的な進め方について整理する。探究活動を効果的に進めるための方策、例えば、探究活動ルーブリックの開発、探究段階に応じた教員の関わり方についての整理、探究段階に応じた発表会の設定等についてモデルを構築する。

また、地域とグローバルな視点を重ね合わせた地域課題解決探究・学習モデルを構築する。海外研修などを通じて生徒による地域探究活動と世界の課題事例との共通点を探り、本質的な課題解決に向けた取組を行う。また最近特に注目されている SDGs を紐付けたマップやエッセイの蓄積、海外来校者やアジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生の視点を生かした新たなアイデア創出等を行う。なお、アジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生について、本校は平成30年度から受入れを行っており、令和3年度は2名の留学生が滞在している。

目的B「原子力災害特有の課題に加え、全国・世界の課題が先行して生じている地域の特性を理解し、新たなコミュニティや産業を創造し、課題解決に貢献する人材の育成」に対する目標

本校では教育活動を通じて育成したい具体的な資質能力をルーブリック（添付資料3）にまとめている。本校のルーブリックは知識、技能、人格、メタ認知といった学力概念のもと10項目あり、定性的に表現しているが、それをレベル0（低い）～5（高い）の数値で規定している。「0」は全く達成できていないレベル、「3」は教員が求める学校で達成してほしいレベル、「5」は「変革者」を達成できることが想定される極めて高いレベルである。ルーブリック評価は入学直後から卒業まで数回実施し、生徒の資質能力の伸長度合いを測定している。今回、定量的目標の最も重要な項目として、「3年生最後のルーブリック10項目のレベル平均値で3.5以上」を掲げることとした。これまでの推移では年を経るごとにレベル平均値は上がっている（一期生（平成29年度卒業生）：1.99、二期生：2.63）が、3.5という値は実現できておらず、挑戦的なレベルである。なお、ルーブリック評価は自己評価であるが、客観性を高めるため、生徒同士によるピアレビューや教員との面談を試験的に実施しつつあり、本事業ではこの評価システムを確立する。

また地域社会への貢献についての目標として、「卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上」という項目を掲げる。本校では、高校卒業後、就職希望が30%程度、進学希望が70%程度である。就職希望の生徒はほとんどが地元就職するのに対し、進学希望の生徒のほとんどは地域外の大学等へ進学する。これはこの地域に高等教育機関がほぼないことが大きく影響している。そこで地域への貢献の指標として将来的な地域貢献への期待度を示すアンケートを取り上げることとした。地域に根差した探究活動を行うことにより地域の魅力を発掘し、将来、この地元に関わりたいと感じる生徒の割合は高くなることを確信している。

目的C「双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果の創出、及び全国の高校への波及」に対する目標

本校は、「福島県双葉郡教育復興ビジョン」のもと、地域との連携を重視して開校したが、これまでのネットワークを一層拡充し、教育と復興の相乗効果の創出のための地域協働体制を確立する。そのためにコンソーシアムを組織的かつ実働的なネットワークとして機能させる仕組みを構築する。コンソーシ

アムでは8町村という広域での連携をカバーし、行政、民間、教育界といった幅広い業種による連携を目指す。本校が行う活動に協力をいただくだけでなく、連携側も本校の校舎を積極的に活用する等、学校を核とした多方向の連携、ネットワークの構築を目指す。

また、モデル校としての高等学校教育改革推進への波及に対する達成目標としては、多面的な定量的目標として、「保護者アンケートによる本事業への70%以上の肯定的評価」、事業への外部からの関心の度合いとして「視察、研修、発表会、聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数 250人以上」等を掲げることとした。さらに地域と連携を測る指標として「地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数 50件以上」、「本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間のべ件数 200件以上」を掲げることとした。

地域との協働による高等学校教育改革推進事業 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)
a	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を図るものとして、管理機関において設定した成果目標) 本校で規定する人材育成要件・ルーブリックレベルの3年次最終調査における平均値					単位：なし
	本事業対象生徒：		本校舎全校生	本校舎全校生	本校舎全校生	3.5
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：ルーブリック評価は年に2回程度定期的実施する。生徒の自己評価であるが、生徒同士のピアレビューや教員との面談などで客観性を高める。途中経過のチェックも可能であり、定量的評価として好適である。						
b	(高校卒業後の地元への定着状況を図るものとして、管理機関において設定した成果目標) 卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上					単位：%
	本事業対象生徒：		本校舎全校生	本校舎全校生	本校舎全校生	70
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：アンケートは生徒の自己評価であるが、理由も書かせるため信頼性は高い。進学する生徒もあり、定着状況は長期的な視点で地元への還流を見据えた指標として取り上げることとする。						
c	(その他本構想における取組の達成目標) 本事業に関する保護者アンケートによる肯定的意見の割合					単位：%
	本事業対象生徒：		本校舎全校生	本校舎全校生	本校舎全校生	70
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：保護者を対象とした学校評価アンケートの中に本事業に関する項目を加えて、保護者による本事業に対する意識調査を行う。						

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を図るものとして、管理機関において設定した活動指標) 地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数					単位：件
	22	31	40	45	50	50
	目標設定の考え方：本件数は、地域の方々との連携の度合いを示す指標として好適である。全校生の1年間を対象とする					
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を図るものとして、管理機関において設定した活動指標) 視察、研修、発表会聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数					単位：人
	調査なし	200(見込み)	200	230	250	250
	目標設定の考え方：来校者数は本校の注目度を表す指標となる。					
c	(その他本構想における取組の具体的指標) 生徒の外部発表、コンテスト応募件数					単位：件
	調査なし	30(見込み)	35	40	45	45
	目標設定の考え方：外部発表、コンテスト応募件数は、本校の完成度の高いプロジェクト数の指標となる。					

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(年度)
a	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間の件数					単位： 件
	133	150 (見込み)	165	180	200	200
目標設定の考え方：関わっていただく地域の団体の数はそのまま活動状況を表す指標となる。						
d	(その他本構想における取組の具体的指標)					単位：
目標設定の考え方：						

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
全校生徒数(人)		421	440	463	480
本事業対象生徒数			381	403	420
本事業対象外生徒数			59	60	60

4 実施体制

(1) 管理機関及びコンソーシアムの実施体制

① 管理機関における実施体制や事業の管理方法

双葉地区の未来を創造するリーダーの育成を具現化するために、双葉郡8町村、高等教育機関、地域、産業界、NPO等がコンソーシアムを構築し、協働して双葉郡ならではの教育を推進するとともに、子どもたちの実践的な学びで地域を活性化し、教育と地域復興の相乗効果を生み出すことで、地域ならではの新しい価値を創造できる人材を育成する。また、管理機関独自の予算措置を行うとともに、事業をきめ細かく実施できるように教員の配置等の人的支援を行い、定期的に学校を訪問し事業の進捗を確認し、必要に応じ指導助言を行う。

② 運営指導委員会の構成（令和2年度より継続）

氏名	所属・職	備考
飯盛 義徳 氏	慶應義塾大学総合政策学部教授	プラットフォームデザイン、地域イノベーション
田熊 美保 氏	経済開発協力機構(OECD)教育局教育訓練政策課シニア政策アナリスト	教育政策国際比較、教育政策評価、Education2030
田村 学 氏	國學院大學人間開発学部初等教育学科教授	総合的な探究の時間の指導、カリキュラム研究

③ コンソーシアムの体制（令和3年度の体制）

機関名	機関の代表者名
双葉郡教育復興ビジョン推進協議会（双葉郡浪江町教育長、双葉郡教育復興ビジョン推進協議会及び双葉地区教育長会 代表）	笠井 淳一 氏
福島大学人間発達文化学類教授	中田 スウラ 氏
公益社団法人福島相双復興推進機構（福島相双復興官民合同チーム） 専務理事	桜町 道雄 氏

公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構 教育・人材育成部長	山内 正之 氏
認定 NPO 法人カタリバ 双葉みらいラボ拠点長	横山 和毅 氏
福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校長	柳沼 英樹 氏
福島県教育委員会 教育次長	丹野 純一 氏

④ コンソーシアムにおける実施体制や事業の管理方法

本校建学の礎である「福島県双葉郡教育復興ビジョン」推進のための「福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会」がこれまで定期的に開催され、管理機関及びふたば未来学園も参画している。同会議における全体ビジョンの検討と、学校における地域協働による個別の探究実践との間をつなぐ実働的な枠組みが求められており、コンソーシアムはこの役割を果たす。コンソーシアムは管理機関が統括し、本事業の方向性や人材育成要件の確認、カリキュラムへの助言、参画各機関の特性を活かした生徒の探究活動の支援を行う。

⑤ カリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員の配置や活用に関する計画

カリキュラム開発等専門家：長谷川勇紀氏（NPO 法人カタリバ双葉みらいラボ拠点長） 探究活動のカリキュラム策定や地域探究活動の効果的な進め方について助言をいただく。
 海外交流アドバイザー：島田智里氏（ニューヨーク市役所公園局都市計画&GIS スペシャリスト） 海外との連携について国際協働と地域開発の専門的観点から助言をいただく。
 地域協働学習支援員：平山勉氏（双葉郡未来会議 代表） 双葉郡 8 町村の住民主体の復興活動のハブとしての立場から、地域探究活動における連携先について助言をいただく。

⑥ 管理機関及びコンソーシアムにおける活動計画

	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月
管理機関	○活動計画の実施や教育課程特例取得に向けた指導助言	○第 1 回コンソーシアム協議会の開催（事業の進捗確認） ○第 1 回運営指導委員会の開催 ○教育課程特例の申請	○学校訪問による指導助言	○第 2 回コンソーシアム協議会の開催（成果の検証） ○第 2 回運営指導委員会の開催
コンソーシアム	○事業構想、人材育成要件、役割等の確認、共有 ○フィールドワーク・探究活動への人的支援	○生徒探究発表会への参加、広報、助言等 ○フィールドワーク・探究活動への人的支援	○フィールドワーク・探究活動への人的支援 ○地域協働における学校校舎の活用	○生徒中間発表会への参加、広報、助言等 ○フィールドワーク・探究活動への人的支援 ○地域協働における学校校舎の活用 ○1年間の総括

⑦ 事業終了後の取組計画（カリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員の配置・活用計画やコンソーシアムのコミュニティースクール化等を含む。）

本事業終了後についても、地域参画でカリキュラムの改善や地域協働の深化を継続するため、コンソーシアムの枠組みを維持することを検討する。また、カリキュラム開発等専門家や地域協働学習支援

員の協力を仰ぎながら、同様の事業を継続するとともに、両者の役割を一部でも教員が担えるよう、本事業実施期間内にノウハウの伝達を行い、地域協働の取組の持続可能性を高める。費用については引き続きの事業継続が可能となるよう管理機関において支援するとともに、地域から持続可能な体制の構築について助言をいただき、各種団体の助成金等を活用し自走できるようにしていく。

⑧ 学校と地域団体・大学等との連携協定の概要

- 双葉地区教育長会（双葉郡8町村）がまとめた「双葉郡教育復興ビジョン（25年）」に教育復興の方向性と本校開校の方向性が示され、現在も同会と継続的に協働している。
- ふたば未来学園と関係機関による協働コンソーシアム連携協定（令和2年度締結予定）

（2）学校の実施体制

① 学校における研究体制、教職員の役割、事業実施への支援体制等

- 本事業の企画運営を専門的に行う校務分掌として「企画研究開発部」を設置し、本校高校教員の1割程度を配置する。同部では、探究カリキュラム全体の企画立案および運営、地域との接続、国内研修、海外研修、外部講師との交渉、教員研修等を所管する。
- 地域との協働による探究活動は「全教員が担当」しつつ「数名のチーム」体制で指導にあたる。学校全体の探究活動の指導力を向上し教員意識を変革していくため、チーム内での週次会や、担当教員同士が課題を共有し解決策を検討する月次会を設定するとともに、全教員参加の研修会「未来研究会」を年間10回程度開催し、組織的な研究開発を進める。

② カリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員の学校内における位置付け・役割、活用方法

- 各専門家・支援員を教職員の重要なパートナーとして位置づけ、校内にも専用の机を確保し、いつでも来校して担当教員と密接な連携・議論ができる環境を整える。
- カリキュラム開発専門家は企画研究開発部と週次の会合を行い、学校設定科目「地域創造と人間生活」、「総合的な探究の時間」、各教科における指導法等について検討する。
- 地域協働学習実施支援員は年間フィールドワーク計画や生徒の探究課題の方向性を共有し、地域の団体等との協働計画を協議するとともにコーディネートする。
- 海外交流アドバイザーは海外との連携に関して教員、生徒共に助言を行う。

③ 定期的な確認や成果の検証・評価等を通じた、究開発の進捗管理や改善の仕組み

- 各取組の際には生徒の「振り返り」を設定し、記述内容から成果・効果を検証する。
- 各学年で年2回、資質・能力のレベルを自己評価する「ルーブリック評価」を行い、能力伸長を測る。評価では自己評価の他に、生徒同士のピアレビューや教員とのルーブリック面談を実施する。これにより多面的な評価を実現するとともに、形成的評価として生徒自身が次の目標設定に向かう成長の機会とする。面談は全教員が担当する。
- 卒業時に「将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）」のアンケートを行い、地域社会への還流を見据えたカリキュラムの効果と課題を検証する。R2年度入学生以降は入学時にもアンケートを行い、卒業時との意識変化も測定する。
- 全体の検証、評価は「企画研究開発部」が中心となって進め、全職員への報告・協議の機会を設けるとともに、コンソーシアム、運営指導委員会に報告し助言を頂く。

④ 学校における外部有識者等の支援・活用体制

○運営指導委員：定期的に本事業に対する意見交換や指導をいただく。委員の専門性を活かして、カリキュラムの方向性、地域との協働における指導方法、有効な評価方法など、多面的な視点からの指導を仰ぐ。特に、世界的な教育の方向性、日本における探究活動やその評価方法等について議論を深める。

○アクセンチュア（株）：人材育成に関する豊富なデータを必要に応じて提供いただきながら、ルーブリックをはじめとする本校の評価について、評価軸の立て方、データの見方考え方、評価のフィードバックと形成的評価への活用の在り方等について支援いただく。

○発表会審査員：生徒の発表について大学、企業、NPO等の視点から意見をいただく。結果に対する意見やアドバイスだけでなく、その先の活動の進め方についても伴走者的な立場で協力をいただく。

⑤ これまでの教育課程等の研究開発の実績

年度	研究開発実績
平成 27～31 年度	スーパーグローバルハイスクール

5 研究開発計画及び内容

※関連資料：別紙様式 3（前掲：ビジュアル資料）

① 研究開発構想名

原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造するグローバル・リーダーの育成

② 研究開発の概要

○カリキュラム開発：全体の柱として学校設定科目「地域創造と人間生活」と「未来創造探究（総合的な探究の時間）」で 3 年間を貫き、地域課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成するとともに地域に貢献する人材としての在り方生き方を涵養するカリキュラムを開発する。

○地域課題解決に貢献する人材育成：地域・世界が直面する困難な課題を理解し、自らの在り方生き方を考え、また実践を重視した地域課題解決の探究を行い、その解決に貢献できる人材を育成する。

○双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果を創出し、全国へ発信する。【補足 5】

③ 研究開発計画に対する仮説の分析及び事業実施より期待される効果

○3年間を通じた「地域課題解決の探究カリキュラム」を構築することで、資質・能力の育成と、地域に根ざした在り方生き方の涵養をより深化することができる。これを一般化し、全国の高校の探究活動の活性化に繋げることが期待できる。

○地域の課題と自らの在り方生き方を重ね合わせて思考しつつ、世界の課題に向き合う経験により、地域と世界の課題の共通性を見出し本質的な解決策を見出すことに繋がる。その上で課題解決の実践を行うことで、地域で新たな価値を創造する力が育成される。

○高校と地域の広域連携モデルによって、生徒の姿が住民にも影響を与え、地域全体の課題意識や行動力が喚起され、創造的な地域を実現することが期待できる。 【補足 5】

【補足 5】 研究開発の内容、仮説の分析、期待される効果

○カリキュラム開発の内容

地域課題解決の探究活動を本校の教育活動の核とする。そのため教育課程の特例により「産業社会と人間」（1 年次 2 単位）を新たな学校設定教科・科目「地域創造と人間生活」に代替した上で、「総合的

な探究の時間」(2・3年次各3単位)と3年間を貫き、地域課題解決の探究活動を実施する。その際、探究と各教科を意図的に往還させ、教科で身に付いたものの見方・考え方、知識・技能等が発揮され、汎用的な能力に高まっていくようカリキュラムを構造化する。

○カリキュラム開発における仮説の分析、期待される効果

・学校設定教科・科目の設置と教育課程の特例の活用

本校では現在、1年生で「地域創造と人間生活」(学校設定科目)(2単位)、2・3年生で「総合的な探究(学習)の時間」(各学年3単位)を実施している。これまで地域探究活動は主に「総合的な探究(学習)の時間」において実施しており、探究活動も年を経るごとに活発になっている。しかしながら1年次と2・3年次の間の接続に課題があった。具体的には、1年生で履修する「産業社会と人間」においては「高等学校教育の改革の推進に関する会議の第四次報告(H5)」に示された通り「職業と生活」「我が国の産業と社会の変化」「進路と自己実現」の3項目で構成し、特に「職業と生活」の指導事項として求められる「各種企業等の見学及び職業人等との対話を通して、職業の種類や特徴、職業生活などについて理解するとともに必要とされる能力・態度、望ましい勤労観、職業観を養うための学習」も実施してきた。一方で、2年次からの「総合的な探究の時間」では時代の変化を踏まえ、地域社会の課題解決に取り組む中から自らの在り方生き方を見出していく学習を行っている。H5年の報告ではある面で職業の種類や特徴は所与の固定的なものとして捉えられている一方、地域課題解決の探究においては産業や職業も自らが地域において創造していく対象の一部である。そのため、「産業社会と人間」では職業について学ぶ他に、新たな地域創造の活動を行っている先人に学ぶ単元を別途設定するなど重複も生じている上、実施してきたものが2・3年生の地域探究活動にあまり活かされていないという課題がある。この課題を解決するために時代の変化に適合させた形で「産業社会と人間」を再編成して「地域創造と人間生活」に代替することとし、地域での活動をより重視することとした。このようなカリキュラム編成にすることにより、3年間を通して地域課題に切れ目なく取り組むことができ、地域探究活動を現状以上に活性化させることができる(仮説)。さらに探究活動が活性化することにより、生徒の地域や実社会の課題に向かう意欲や行動力が喚起され、地域に根差した在り方生き方が涵養されることが期待できる(期待効果)。

・探究プロセスの確立

一般に探究活動は「調査」「課題発見」「テーマ設定」「課題解決」の各プロセスが挙げられ、これらを、PDCAサイクルを回して進めていくことが言われている。多くの探究プロセスで活用できるものの、実践しようとするとう漠然としているあまり、指導教員は戸惑うことが多かった。また「課題解決」の段階においては単なる調査研究で終わってしまうケースが多く、真に解決に至るケースは少なかった。また探究活動のステージに応じた生徒と教員の関わり方についても、これまでそれほど多くの関心を持たれてこなかった。そこで本事業では下表に示すような本校独自の探究プロセスや指導方法を構築する。

表 本事業で構築していく探究プロセスの概要(◎はその時期における主要な姿勢、関わり)

時期	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期
探究段階	系列選択、職業観育成(産業社会と人間の内容)	調査のためのアクション 地域の現状分析		解決のためのアクションと考察 アクションー考察サイクル		まとめ 論文作成
生徒の探究姿勢	守(受容的)	◎守(受容的) 破(生成的)	守(受容的) ◎破(生成的)	守(受容的) 破(生成的) ◎離(自走的)	守(受容的) 破(生成的) ◎離(自走的)	守(受容的) 破(生成的) ◎離(自走的)
教員の関わり方	インストラクター	インストラクター	インストラクター ◎ファシリテーター	インストラクター ファシリテーター ◎メンター	インストラクター ファシリテーター ◎メンター	インストラクター ファシリテーター ◎メンター

具体的には探究の大枠として「調査のためのアクション」と「解決のためのアクション」を明確に分けるプロセスである。いずれの段階も重要であるが、特に本事業では「解決のためのアクション」を重点化していく。また、これらの段階を明確に生徒に意識させるため、区切りとなる時期に発表会を実施し、対象生徒全員がそのステージをクリアしながら探究活動を進めていくようにする。また、生徒と教員の関わり方について、上記のステージに応じて、インストラクター的、ファシリテーター的、メンターの役割を担うことができるよう、整理をしていく。このような探究プロセスの明確化、特に「解決のためのアクションの重視」により、生徒が地域の課題としっかり向き合い課題解決にむけて着実に取り組むことができるようになる。また教員の関わり方を明確にすることにより教員の指導力向上や生徒の主体的な探究活動の質的な向上につながることを確信している（仮説）。さらにこの取組を一般化することにより、地域探究活動の進め方の先駆的事例として広く活用していただくことができれば、全国の地域探究活動の活性化につながることを期待できる（期待効果）。

○地域課題解決の探究の内容

1年生の学校設定教科・科目「地域創造と人間生活」では、「産業社会と人間」としての内容を実施しながら地域課題解決の探究の導入を行う。「産業社会と人間」の内容として具体的にフューチャーマップによるライフプラン作成、系列選択等を行い、職業観の育成、進路意識の高揚を図る。また地域課題解決の探究活動の導入として双葉郡の現状を知るフィールドワーク、マインドマップ等によるスキル学習、地域調査と演劇、グローバル課題に関するワーク等を実施する。

2、3年生では「総合的な探究（学習）の時間」において地域に関する課題探究活動を行う。地域の特性や特に重視すべき領域に焦点をあて、以下に示す6つのゼミを設置し、生徒の希望により振り分ける。その際、本校の系列（アカデミック系列、トップアスリート系列、スペシャリスト系列）についても考慮する。

原子力防災探究ゼミ	メディア・コミュニケーション探究ゼミ	再生可能エネルギー探究ゼミ
原子力発電所事故後の地域社会のあり方について探究する。廃炉の進め方や汚染水の処理方法等、事故後の様々な処理について地域がどのように関わらなければならないのか、避難や帰還の過程で生じた対立や分断をどのように解決するのか、避難により断絶してしまった地域コミュニティをどう復活させるべきか、といった課題に取り組み、解決に向けて実践する。	地域におけるメディア・コミュニケーションのあり方について探究する。誤解或いは意図的に加速させられている分断・対立を止揚する情報発信やコミュニケーション、災害時のメディアの効果的な活用方法、災害と厄災の教訓の発信と伝承などに向けて、メディアが果たす役割等について課題を設定し、その解決に向けて実践を行う。	歴史的に全国のエネルギー供給地であり、原発事故以降、特に再生可能エネルギーの研究開発拠点が集中する本地域の特性を活かし、再生可能エネルギーを中心としてエネルギー全般について探究する。科学的なアプローチのみならず社会的なアプローチでも考察し、望ましい人間社会と、地球環境やエネルギーの関係性について探究し、実践を行う。
アグリ・ビジネス探究ゼミ	スポーツと健康探究ゼミ	健康と福祉探究ゼミ
地域の復興を農業、商業の観点から探究する。地域資源を活用した新たな産業の創出、農山漁村の6次産業化など、ビジネスや生業の観点から探究し、実践を行う。特に地域の農水産物や商品について、風評の実態調査、その解決策、地域の食を活用したコミュニティ形成等について課題を設定し、その解決に向けて実践を行う。	Jビレッジが所在しスポーツが身近な環境を活かし、スポーツを通じて地域を豊かにする方策を探究する。総合型地域クラブによる地域活性化、健康増進、子供のスポーツ環境支援、五輪を契機とした復興、スポーツビジネスによる持続可能で豊かな地域の実現や、アスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行う。	少子高齢化や人口減少が一段と加速した福島の地域を全国の課題先進地域として捉え、健康長寿の実現の方策を探究する。中核病院・地域医療・介護・福祉が結びついた地域包括ケア、地域の高齢者・大人・子供などの多様な世代の共助による生きがいのある生活の創造等の課題を設定し、解決に向けて探究と実践を行う。

これらのゼミで扱う課題は双葉郡で特に重視すべき課題であるが、同時に世界的にも共通する課題である。地域に焦点をあてる一方で、世界でこれらの課題にどう向き合っているかという視点も加えながら、実践を進める。

ゼミでは生徒の探究ステージに応じて柔軟に指導し、生徒の主体性や行動力を育む。また探究ステージを明示し、調査研究に留まらず、課題解決のための実践を重視した取組を行う。

地域課題解決の探究活動については、本校舎（福島県広野町）の生徒全員を対象とする。本校には系列が3つあり、多様な生徒がいるが、それぞれの系列の特徴を生かした活動が可能になるように工夫する。系列と関連したゼミを選択する場合、自分の専門分野を地域の課題と関連させ深く学ぶことができる。一方、系列に縛られず自由な発想でゼミを選択した場合においても、系列とゼミテーマを関連させながら、多様な見方考え方を獲得することが期待される。

○地域課題解決の探究における仮説の分析、期待される効果

震災、原発事故に見舞われた福島県双葉郡には復興に向けた意欲の高い方々や団体が多く、探究活動においてもこれらの方々と連携して取り組むことが多かった。また連携先は本校の位置する広野町が中心であった。しかし連携の在り方についてはいくつか課題が残った。具体的には、双葉郡8町村とは「双葉郡教育復興ビジョン推進協議会」における年複数回の協議の場でビジョンについては共有しているものの、具体的な地域協働については本校に委ねられており、連携の糸口が教員個人の繋がりに依存してきた点、連携が単発で一方的な依頼になりがち点、連携先との意思疎通が低い点（学校教育についての理解不足）、地域が近隣町村に偏りがちである点等である。これらを解決するために本事業ではコンソーシアムや地域協働学習実施支援員の活用、連携先の特性に応じた連携の在り方の整理をしていく。コンソーシアムは、連携の在り方についての議論を深めることを主目的とする。またコンソーシアムには双葉郡8町村に関わるメンバーにも加わっていただき、これまで以上に広域での活動を促進する。地域協働学習実施支援員については個々の取組についての適切な連携先についての情報提供をしていた。これにより学校と連携先の組織的な繋がりが可能となり、また双方向の意思疎通がよりスムーズに運ぶようになり連携事業をより深化させることができる（仮説）。さらに地域連携が進展することにより、本校が目指している地域と学校の一体化が実現できると期待される（期待効果）。また、広域市町村を「地元＝立地」と捉えた高校を核とした地域活性化のモデルは、今後学校統廃合が進む全国の地域にとって、統廃合を契機として地域の活性化に繋げるモデルともなることが期待される（期待効果）。

○海外研修等の内容

原子力災害からの復興や持続可能な地域づくりを主要テーマとしたドイツ研修、ニューヨーク研修を行う。ドイツ研修では地域住民のまちづくりへの参画やエネルギーに対する考え方、ニューヨーク研修では持続可能な社会づくりと若者の役割について学ぶ。これらのテーマは地域的にも国際的にも共通する課題であり、同年代の生徒と深く議論する機会を設定する。なお、これらの研修は希望者を対象とするが、研修の成果は全生徒に波及するように工夫する。具体的には発表会の開催、SNSを通じた海外高校生との連携企画、地域課題解決の探究活動のテーマによる意見交換の機会の設定などが挙げられる。

また本校で受け入れている「アジア高校生架け橋プロジェクト」留学生やALTも活用し、異なる価値観の人たちと日常的に協働して探究活動を進めていく。

○海外研修等における仮説の分析、期待される効果

本校ではこれまでいくつかの海外研修を実施し、グローバルな視点を持ち行動力の高い生徒の育成に繋げてきた。海外研修にあたり、従来の位置づけ（グローバルな視点の獲得、外国語コミュニケーション力の育成、福島の現状報告）をより具体化、深化させ、以下のように位置付ける。

- ・地域課題と世界的な課題との共通性の発見から本質的な課題解決へ

本校で実施する地域課題解決の探究活動は6つのゼミに分かれて実施する。各テーマは地域に根差したものであるが、本質的には世界でも共通する課題である。例えば原子力防災探究ゼミでは原子力災害からの復興課題を掲げているが、天災人災を問わず、災害に対する適切な対応は、東日本大震災以降、特に注目されているところである。またメディアコミュニケーション探究ゼミで実施する課題には教訓

を次世代に活かすことが大きなテーマとなっている。世界を揺るがす多くの事案の後には必ずこの課題が伴っており、世界から学ぶところも大きい。生徒自身が自身のテーマを持って海外研修を行うことにより、自身のテーマの普遍性を学び、本質的な解決策への足がかりを得ることができる。また、単発の研修に終わらず、海外研修後の継続的な実践や議論に接続することが可能である。

・社会の構造的な課題

双葉郡は震災、原発事故により避難を余儀なくされ、一時は住民が誰もいなくなった地域であり、地域を初めから構築し直す経験をしてきた。この経験から住民のまちづくりへの参画の在り方については特に注目すべき点がある。ここには日本が抱える「少子高齢化」はもちろんのこと、多くの課題が山積している。一方で「一から」地域社会をつくるという観点からは、従来の施策に縛られない創造性豊かな未来を描くことも可能である。このような観点から世界の先進的な地域社会を学ぶことは非常に意味が大きい。海外では、住民と行政が一体でまちづくりを進めている事例が多く、これを学ぶことで自分たちが住む地においても、住民と行政が深く関わりながら課題に向かう取組に発展させることができる。

・異質からの学び

福島県は健康被害、食、観光等において未だに風評被害や差別に苦しんでいる。これらの本質の一つは、異質なものに対する違和感やイメージ先行の見方考え方にある。多民族が共存する海外は異質なものの宝庫であり、偏見・差別等の共通の課題をどう乗り越えていくのか多くを学ぶことができる。

・主体性の育成

これまでの海外研修経験者の様子から、研修実施後には主体性が大きく育まれていることが伺えた。この能力をさらに育成するために海外研修の在り方を再検討する。これまで教員側が様々な指示を与えながら実施してきたが、教員が担ってきた役割を極力生徒側に委譲し、生徒中心の研修運営を促進する。具体的には研修先の選定、事前研修、事後研修といった計画策定等が挙げられる。教員はファシリテーターとして生徒の運営をサポートする。また海外研修アドバイザーに生徒と積極的に関わっていただく。

④ 研究開発のスケジュール

ア 3か年の計画

年度	1年目	2年目	3年目
内容	【本事業の整備、運用】 ○コンソーシアムの立上と運営 ○カリキュラム整備 ○人材育成ループリック改定 ○探究ループリックの新たな策定と運用	【本事業の本格運用】 ○カリキュラムの確立 ○探究活動の定常化 ○ループリックを活用した評価方法の確立 ○本事業の普及拡大	【本事業の総括と継承】 ○本事業の課題の抽出と対策の検討 ○継続的、発展的な活動に向けての環境整備 ○本事業の普及拡大

イ 令和3年度の計画

	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月
内容	1年：進路、職業選択、人間関係形成に関する活動 2年：地域探究の導入、ゼミ、テーマ探索 3年：地域探究（解決アクション） 《全学年ループリック評価》	1年：地域を知るためのフィールドワーク 2年：地域探究（ゼミ配属、テーマ探索） 3年：地域探究（まとめ、発表）、ループリック評価	1年：演劇による地域の表現 2年：地域探究（テーマ決定、調査アクション）、ループリック評価 3年：地域探究（論文作成） 《全学年学校評価》	1年：国際理解活動、ドイツ研修（希望者）、ループリック評価 2年：地域探究（解決アクション）、ニューヨーク研修（希望者） 3年：論文完成

⑤ 地域との協働により実施する学習内容と教科・科目における位置付け、相互の関係

学校設定科目「地域創造と人間生活」と「総合的な探究の時間」で地域との協働による探究活動を行う際、探究と各教科を意図的に往還させ、教科で身に付いたものの見方・考え方、知識・技能等が発揮され、汎用的な能力に高まっていくことを目指し、教科の視点から知識を学ぶ単元も設ける。一方、各教科においても下記のように探究と接続した内容を取り扱い、教科を学ぶ意欲を喚起し発展的な知識の学習に繋げていく。【補足7】

例) 理科、数学：一次エネルギーのとらえ方、放射線とその減衰、地球温暖化、廃炉技術
 地歴公民：エネルギー供給地としての地域の歴史と背景、原子力災害と地域の未来

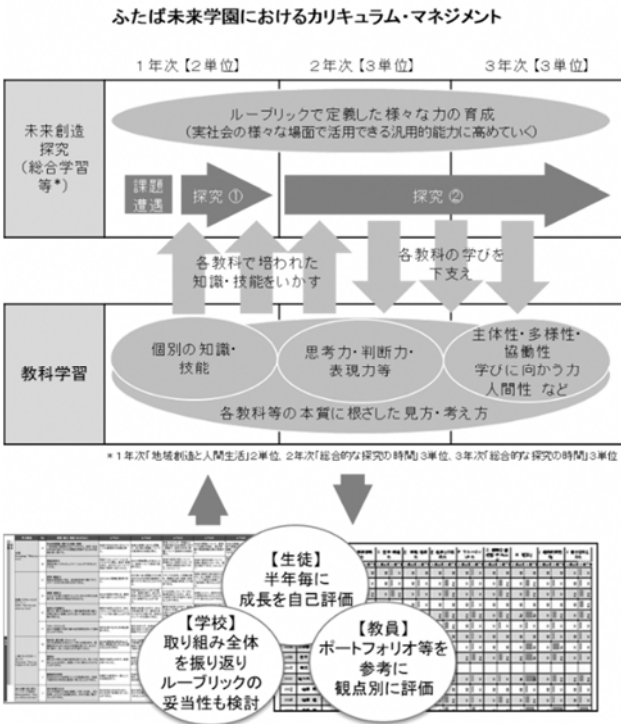
【補足7】 地域との協働により実施する学習は主に学校設定教科・科目「地域創造と人間生活」と「総合的な探究（学習）の時間」の探究活動で実施する。その際、学校全体の意識を統一するルーブリックの設定を始点としたカリキュラムマネジメントを重視していく。

いずれの探究においても、各教科で身に付いた、ものの見方・考え方、知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性、学びに向かう力や人間性などが発揮され、本校がルーブリックで定義した汎用的な能力に高まっていくことを目指す。逆に、カリキュラム全体の軸となる探究があるからこそ、実社会での探究を通じて知識の必要性を痛感する体験等から各教科の学習の意欲が喚起され、各教科の学習活動が確かに下支えされていく。また、内容面に関する知識も、各教科において発展的に学習し、深められていく。

同時に、下記のように本校の全教科においても、地域と関連したテーマを扱っていく。

「地域創造と人間生活」と「総合的な探究（学習）の時間」における探究と各教科のつながりを意図的に生み出し、通常の各教科・科目を探究活動と組み合わせることにより、各教科の学習も表面的な知識や技能の習得にとどまらない、より深い学習となる相互作用が期待できる。

また通常教科・科目において地域のテーマを扱う場合、複数の教科が連携して行う教科連携がより効果的である。教科連携を本校の教員研修「未来研究会」の重点的な取組の一つとして位置づけ、また強化期間を設定することにより、その推進を図る。



国語	レポート、論文の書き方、論理的な考え方
地歴公民	エネルギー供給地としての福島県の歴史とその背景、原子力災害と地域の未来（福島学 社会編）
英語	英語×演劇×地域
数学	データから分析する少子高齢化
理科	一次エネルギーのとらえ方、放射線とその減衰、廃炉技術（福島学 理科編） 日常生活と地球温暖化、福島県の地形と再生可能エネルギー
体育	J ビレッジの地域における役割、スポーツの地域に与える力、
情報	地域の情報発掘とプレゼンテーション
家庭科、福祉	健康と地域活性化
工業	地域エネルギー（学校設定科目）
農業、商業	地元の食材を用いた商品開発

⑥ 他校や他地域への事業成果の普及方策

- 管理機関主催で全県立学校の教員が本校で研修を行い、各校への取組の普及を図る。
- 学校公開日を毎月設定し、本校への視察を積極的に受け入れ発信する。
- 学校ホームページに事業に関する報告や成果を掲載する。
- 生徒の地域課題解決の探究発表会を公開し、成果を発信する。
- 最終年度には教員による成果報告会を実施し、成果を総括し、その普及を図る。

6 学校設定教科・科目，教育課程の特例を活用した取組

① 学校設定教科・科目を設定	○
② 教育課程の特例を活用	○

学校設定教科・科目の設定に関する説明資料

学校設定教科・科目を適用する学校の管理機関	福島県教育委員会
学校設定教科・科目を設定する学校	福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

設定する学校設定教科・科目の内容

教科・科目名	地域創造と人間生活
単位数	2単位
対象学科・学年	1年次
必修修・選択の別	必修修
設定する教科・科目の内容	<p>1 目標</p> <p>地域や社会の変化を見通しながら、自己の在り方生き方を考える活動を通して、主体的に地域に参画し、新たな価値を創造するための資質・能力を次の通り育成することを目指す。</p> <p>ア 社会の変化の中で、主体的に新たな地域社会の創造に参画していく自覚と態度を養う。</p> <p>イ 地域や世界における産業の発展とそれがもたらした社会の変化を理解するとともに、多面的かつ協働的に考察し、望ましい地域社会と生活を創造していく能力を養う。</p> <p>ウ 自己の能力・適性、興味・関心等と地域や社会の未来を創造する上で求められる資質・能力を踏まえ、自己の夢と地域の課題を重ね合わせ、将来の生き方や進路について考察し、主体的に学び続ける能力と態度を養う。</p> <p>2 内容</p> <p>(1) 地域社会の創造へ参画していく自覚と態度の涵養</p> <p>地域を知る学習（双葉郡フィールドワーク）、地域人材インタビュー、国際理解講座等を通して、地域や世界で困難な課題解決に取り組んできた先人の生き方に触れる。</p> <p>(2) 地域社会を創造する力</p> <p>コミュニケーションワークショップ、スキル学習、地域課題の取材と演劇表現の創造を通して、複雑な地域課題を多面的に理解し、新たな地域を創造していく協働力や想像力等の基本的な技能や態度を養う。</p> <p>(3) 生き方と進路</p> <p>自己理解から職業人インタビューを通して、自己・地域・世界の未来を重ね合わせたライフプランを作成し、次年度の系列選択に繋げる。</p>
その他特記事項	教育課程の特例を活用して本科目を設定し、総合学科の原則履修科目として入学年次に履修させるものとされている「産業社会と人間」を代替する。

教育課程の特例に関する説明資料

教育課程の特例を適用する学校の管理機関	福島県教育委員会
教育課程の特例を活用する学校	福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

教育課程の特例を活用して設定する科目の内容

科目名	地域創造と人間生活
単位数	2
対象学科・学年	総合学科・1年次
必履修・選択の別	必履修
特例を活用して設定する科目の内容	<p>(1) 目標 地域や社会の変化を見通しながら、自己の在り方生き方を考える活動を通して、主体的に地域に参画し、新たな価値を創造するための資質・能力を育成することを目指す。</p> <p>(2) 内容</p> <p>ア 地域でのフィールドワークやインタビュー等を通して、困難な課題解決に取り組んできた先人の生き方に触れ、社会の変化の中で主体的に新たな地域社会の創造に参画する自覚と態度を養う。</p> <p>イ 各種スキル学習や地域課題の取材と演劇表現の創造を通して、地域や世界における産業の発展とそれがもたらした社会の変化を理解するとともに、多面的かつ協働的に考察し、望ましい地域社会と生活を創造していく能力を養う。</p> <p>ウ 自己の能力・適性、興味・関心等と、地域や社会の未来を創造する上で求められる資質・能力を踏まえ、自己の夢と地域の課題を重ね合わせ、自己の将来の生き方や進路について考察し、主体的に学び続ける能力と態度を養う。</p>
代替措置	総合学科の原則履修科目として入学年次に履修させるものとされている「産業社会と人間」を本科目に代替する。
特例が必要な理由	<p>○「産業社会と人間」は総合学科の原則履修科目として入学年次に履修させるものとされ、高等学校教育の改革の推進に関する会議の第四次報告（H5）において具体的指導内容が提言され、各校にはこの内容に十分配慮した指導が求められているが、職業の種類や特徴、職業生活の理解等において、固定的な産業や職業が想定されている。</p> <p>○一方本校では Society5.0 の社会像と求められる人材像を踏まえ、地域社会において新たな価値を創造する人材の育成を構想しており、産業や職業は創造の対象の一部である。時代の変化に適合させた形で「産業社会と人間」を再編成することで、狙いを損なうことなく人材の育成がより確かになるため、代替が適当であると判断する。</p>
特例の適用範囲	令和3年度入学生から適用する。

原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造する グローバル・リーダーの育成

研究
開発
構想名

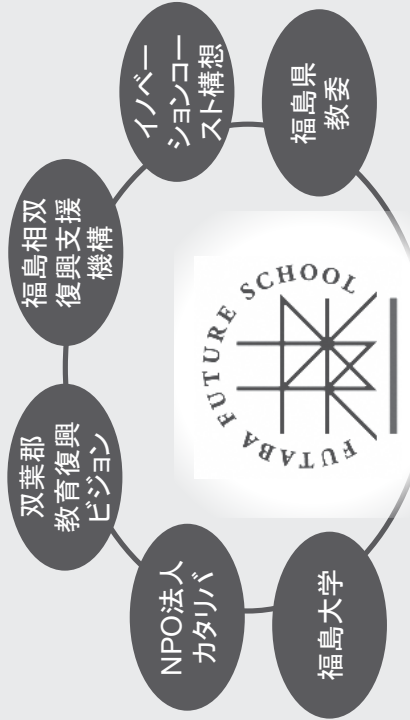
- 目的
- 地域探究と海外研修を体系的に位置づけたカリキュラム開発
 - 地域や世界の課題解決に挑戦する人材の育成
 - 教育と復興の相乗効果の創出、全国の高校への波及

育成
人材像

- 地域や世界の課題と自己の夢とを重ね合わせ、当事者として行動する市民性
- 立場・価値観の違いによる分断や対立を止揚する協働的ネットワーク構築力
- 地域の資源を見出し、地域に新たな価値を創造する力

ふたば未来学園と双葉郡による広域協働コンソーシアム

- ◆ 県、ふたば未来学園中学校・高等学校と双葉郡8町村を中心とする広域コンソーシアムを構築。
- ◆ 生徒の実践的な学びで地域を活性化し、教育と地域復興の相乗効果を創出。



福島県立ふたば未来学園高等学校

- ✓ 将来の地域ビジョン、ふたば未来学園で育成していく人材像の共有
- ✓ 上記に基づきふたば未来学園で展開する教育活動の企画・立案 等

3年間を通じた「地域課題解決の探究カリキュラム」の構築

- ✓ 学校設定科目「地域創造と人間生活」の設置。
- ✓ 課題解決のためのアクションを重視。
- ✓ 教員の関わりを含めた、汎用性のある探究活動指導方法の確立。
- ✓ 地域の特性を考慮した6つの探究ゼミでの実践。

原子力防災探究ゼミ	原子力発電所事故後の地域社会のあり方、廃炉と住民の関わり、地域コミュニティの復活について探究する。
マイ17・コミュニケーション探究ゼミ	地域におけるメディア・コミュニケーションの効果的な活用方法、教訓を継承していくための方策について探究する。
再生可能エネルギー探究ゼミ	エネルギー供給地としての福島県の特徴を踏まえ、エネルギーについて科学的、社会的なアプローチで探究する。
アグリ・ビジネス探究ゼミ	地域の現状をビジネスや生業の観点から調査し、風評払拭や新たな地域活性化の方策について探究する。
スポーツと健康探究ゼミ	Jリーグの近隣という立地を活かし、スポーツを通じた地域活性化や地域の健康増進策等について探究する。
福祉と健康探究ゼミ	少子高齢化の先進地域となっている双葉郡の地域性を活かし、地域の方が生きがいのある人生を送る方策について探究する。

海外研修等による地域と世界の課題解決

- ✓ 自身が取り組む地域課題解決の探究内容について、海外の同世代と議論。
- ✓ 地域課題とグローバル課題の往還による本質的な課題解決策の模索。
- ✓ 事前、事後研修も含めて、生徒が主体となった海外研修構築プロセスの確立。

1年次：ドイツ研修
フライブルク・ミュンヘン

住民の積極的な参画・関与によるまちづくりや再生可能エネルギー活用について学び、今後の地域の在り方について考察する。演劇やプレゼンによる福島の実状報告を行い、地域の理解を促進する。

2年次：米国研修
ニューヨーク、国連本部

「持続可能な社会づくり」をテーマに地球規模での課題について国際機関や世界の同世代と意見交換、議論を行う。差別や対立・分断について米国の現状を学び乗り越える方策を探る。

2. 1 地域創造と人間生活

本校の地域創造と人間生活は、①自分を知る、②地域を知る、③世界を知るという3つの柱でカリキュラム開発を行ってきた。①については自分史やマインドマップを用いた自己理解を通して、将来を見据えてありたい自分を考え、②では演劇を通して地域の課題を知る学習を行い、③では世界の様々な困難を肌で感じてきた方からの協力で、世界の課題を知り、自分、地域、世界をつなげ、2年次からの未来創造探究に繋げてきた。今年度は新型コロナウイルス感染拡大による休校措置で、当初の予定通りにプログラムを実施できないこともあったが、Zoomを使ったオンラインでの授業や、Google ClassroomやFlipgridを使用した課題の提出・共有などに素早く切り替え、チームで代替企画を考え、コロナ禍だからこそできる学びのバージョンアップを追求した。

2. 1. 1 課題を知る学習

(1) 実施内容

① オリエンテーション / アイスブレイク

昨年度は新型コロナウイルス感染拡大によりオンラインでの実施となったが、今年度は対面での実施が叶った。初めて出会う「地域創造と人間生活」という授業に対し不安を抱えている生徒と目線合わせを行い、仲間がしゲームや地域クイズなどを通し、生徒同士の関係作りを行った。



② コミュニケーションWS / 演劇WS

生徒同士で対話のしやすい雰囲気を作るために、ワークショップを二週にかけて行った。コミュニケーションWSでは体を動かし楽しみながら、生徒同士で、あるいは教員・講師の方々と交流を深める様子が見られた。また、このWSは、教員が生徒の性格や関係性の把握にも効果があったと考えられる。

演劇WSでは、NPO法人PAVLICの方々とオンラインでつながり、これまでの人生について振り返り人生グラフを作成した。震災を直接的に体験している生徒の多くは、5歳のときにグラフがガクッと下降しており、震災による影響の強さがうかがえた。



③ 双葉郡8町村バスツアー事前調べ学習

双葉郡の現状と課題を実際に自分の目で見て、この地で学ぶ意味を考えるとともに今後の演劇及び探究活動につなげることを目的として、双葉郡8町村バスツアーを毎年実施している。今年度は5月末に実施予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大により7月に延期せざるを得なかった。

「地域創造と人間生活」を履修する高校1年生には、東日本大震災を知らない・体験していない生徒もいるということを踏まえ、まずは地域を知るために調べ学習を

行った。マンガラートを活用して地域の魅力を知るだけでなく、震災前と震災後の地域の比較も行った。震災後の8町村に対し、「人口が少ない」「寂しい」といったネガティブなイメージをもっている生徒も見られたが、調査を進めていく中で、地域を盛り上げるために行動している方が沢山いるということを学んだ。

④ 双葉郡8町村バスツアー

日時：7月7日(水)

講師：

1号車	浪江町	木村正信(浪江町役場) 鈴木知洋(本校教員)
	檜葉町	森雄一朗(一般社団法人ならはみらい) 松本 淳(株式会社FiveStar)
2号車	葛尾村	堺 亮裕さん(一般社団法人葛力創造舎)
	双葉町	松本佳充(元双葉高校教員)
3号車	広野町	磯辺吉彦(広野わいわいプロジェクト)
	大熊町	佐藤亜紀(大熊町復興支援員)
4号車	富岡町	青木淑子(3.11富岡町を語る会)
		平山 勉(双葉郡未来会議事務局代表)
	川内村	井出寿一(一般社団法人かわうちラボ)

行程：

1号車 浪江町・檜葉町

学校 ~ 浪江高校 ~ 国道114号で沿岸部方面へ道の駅なみえ ~ 請戸漁港・請戸小学校 ~ 大平山霊園 ~ 展望の宿天神 ~ 檜葉周辺ツアー(みるーる天神、木戸川漁協、Jヴィレッジ 檜葉遠隔開発技術センター、道の駅ならば みんなの交流館ならば CANvas) ~ 学校

2号車 葛尾村・双葉町

学校 ~ 葛尾村(かつらおヤギ広場がらがらどん) ~ 落合集会所 ~ 双葉町へ移動 ~ 双葉高校 ~ 双葉駅周辺ツアー ~ 東日本大震災・原子力災害伝承館 ~ 学校

3号車 広野町・大熊町

学校 ~ 広野町内散策(防災緑地、新妻有機農園、広野復興公社(バナナ園)) ~ 大熊食堂 ~ 大熊町内散策(大熊町役場、商業施設、災害公営住宅) ~ 大野駅 ~ 大野小学校・ネクサスファームおおくま・酒米田んぼ等車窓より視察 ~ 学校

4号車 富岡町・川内村

学校 ～ 富岡高校 ～ 富岡町内散策 ～ ふたばいんふお ～ 川内村へ移動 ～ 高田島ヴィンヤード(ワイン畑)・サラブレッド馬牧場・川内小中学園・かわうち保育園 ～ 天山文庫 ～ 学校



概要：

クラスごとに、1日かけて双葉郡内8町村のうち2町村をめぐった。浪江高校、双葉高校、富岡高校を訪問した生徒達の中には、大震災から10年以上経つ現在でも、時がとまったままの校舎を見て言葉を失っている生徒もいた。



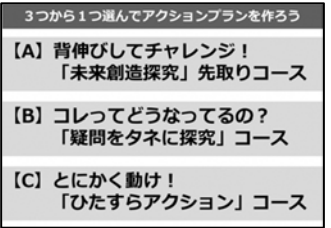
また、地域で生きる方々や、地域を盛り上げるために活動している方々とも直接交流ができたことで、今後の演劇創作や未来創造探究につながる学びとなった。本校には、福島県外出身者も多数在学している。事前に調べ学習を行い、地域についての知識をインプットした状態で、バスツアーを実施できたことも大きい。それにより、実際に自分の足でその地を訪れた際に得る学びが深化したと考えられる。また、双葉郡出身者で、震災後避難して以来初めて故郷を訪れる生徒も一定数おり、バスの中から自分の家のあたりを必死で探す様子もみられた。震災以前とは様子の変わった町に驚く生徒もいたが、10年振りに故郷を見て様々なことを感じたようだ。バスツアー振り返りでは、こちらが想像したよりも生徒は多くの学びを得ていたようだ。

バスツアーの感想より	
実際に見て、話を聞いて、少しずつ復興が進んでいることがわかった。	人口も少ないけど、小さい村でも資料よりたくさん面白いことや食べ物があつた。
行ってみたいとわからなかった。	ふたば未来ができた意味を考えた。
結構復興してる・・・のかな？	実際に休校になった校舎を見て衝撃だった。
津波で流された土地、自分だったら考えると辛いなと思った。	みんな多くのものを失ったんだと思った。自分はそんな人達のために何が出来るだろう。
もっと地域の人たちと関わりたい。	イベントとか参加してみたい。
同じ双葉郡にいても知らないことが多い。じゃあ県外は？海外は？どうやったら伝わるだろう。	時間が止まったまま。いつも遊びにきてね、と言ってもらった。夏休みにもう一度行ってみたい。

⑤ 夏休みプチ探究

夏休みの宿題として、プチ探究を実施した。双葉郡バスツアーを経て、自分の気になるものに対して何かしらアクションを起こすことを目的とした。右上の3つのコースから自分に合ったものを選んでもらった。成果物として、アクション結果をGoogle Formに入力することと、短い動画にまとめて提出してもらった。提出先は、生徒

達でも携帯電話から簡単にアップできるよう、Flipgridを使用した。生徒達はバスツアーで双葉郡に興味を持ち、自分たちの興味・関心をベースに自由にアクションを行った。生徒達の得意とする動画を使った表現にしたことで、生徒達も楽しみながら取り組むことができたようである。生徒が提出した動画はどれもクオリティが高く、双葉郡の魅力がより伝わるものとなった。



「ひまわり迷路」(広野町)



浅見川の水質調査(広野町)



「木戸川ゴミ拾い」(楡葉町)



(2) 成果

昨年度と比較すれば、今年度はコロナによる影響はうけながらも対面での実施が叶った授業が多数あつた。予定通りに進めることができない部分も、Zoomを使ったオンラインでの授業や、Google Classroom、Flipgridなどを用いて柔軟に対応できたことが、生徒の学びをとめただけでなくICT能力の向上にも寄与した。

また、実際に双葉郡を自分の目で見たり、直接地域の方々と触れ合ったりするということの大切さを改めて再認識することもできた。

(3) 課題と展望

昨年度から1日かけてバスツアーを実施することで、双葉郡8町村全てに足を運ぶことが出来るようになった。しかしその一方で、時間的な制約も多く、じっくりとツアーすることができないという点が課題である。関わってくださる方も増えると共に、震災を直接的に体験していなかったり、体験していても記憶が定かではなかったりといった生徒も増えてきた。来年度以降はさらにコースを増やし、それぞれの地域をより深く学ぶ機会としていきたい。

2. 1. 2 演劇

本授業は、劇作家・演出家、芸術文化観光専門職大学学長 平田オリザ先生をはじめ、NPO 法人 PAVLIC より、劇作家・演出家のわたなべなおこ氏他多くの演出家、舞台俳優を講師として招聘し、「地域創造と人間生活」の課題発見・解決学習 Project Based Learning (PBL)として実施した。演劇を通して「多様な価値観を多様なまま理解する力」と「多様な価値観の共存」に向けて自分達が思考を深めることをねらいとしている。生徒全員が16班に分かれて演劇を創作し、演じた。

生徒達は課題を知る学習における双葉郡8町村バスツアーを通して、震災前と後の双葉郡の変容について話を聞き、地域の復興に向き合う。また、演劇の題材となる地域の課題を発見するために、事前に調べ学習をした後、地域の公共機関や商店、企業などを訪問し、フィールドワーク(FW)を行う。生徒たちは復興に携わる地域住民の内面に焦点を当ててインタビューを行い、学んだ内容を演劇創作につなげていく。演劇創作の中では、訪問先における復興に向けたありのままの姿や悩みを持ち帰り、議論しながら双葉郡の復興のための核心的な課題を見つけ出す。それぞれが置かれる立場の違いから生じる葛藤や対立など、複雑に絡み合う事象から、解決できない課題があることを認識する。生徒は発見した課題や学びを、その後2年次から展開される未来創造探究(探究活動)を通じて探究することになる。

(1) 目的

- ① 出身中学校を問わず、学校の所在する広野町の特色や課題の理解を深めるために、自分たちが設定した具体的な課題に基づき、地域住民や企業、公的機関、施設等への取材(FW)を実践し、地域についての正しい知識を身につける。
- ② 対話劇を創作することで、地域の様々な立場の方々の視点で物事多面的に見つめ、そこで出てきた課題と向き合い、2年次以降の未来創造探究での活動に繋げる。
- ③ 自分達の学習の成果について、特に伝えたい内容や相手を踏まえた有効な方法を確立し、校内外での発表を通して正しく伝える。

(2) 授業概要

		時間割	学習活動	講師来校
1	9月15日(水)	5・6	取材先を決める	
2	9月22日(水)	5・6	演劇オリエンテーション① / 取材準備	
3	9月29日(水)	5・6	演劇コミュニケーション② / 取材準備	
4	10月6日(水)	5・6	演劇創作のための取材	
5	10月13日(水)	5・6	演劇創作のためのFW	
6	10月20日(水)	5・6	演劇創作WS ①	○
7	10月27日(水)	5・6	演劇創作WS ②	○
8	10月28日(木)	終日	演劇創作WS ③	○
9	10月29日(金)	終日	演劇創作WS ④・中間発表会	○
10	11月17日(水)	5・6	演劇創作WS ⑤ ブラッシュアップ	○
11	12月8日(水)	5・6	演劇創作WS ⑥ ブラッシュアップ	○
12	12月14日(火)	終日	演劇成果発表会	○
13	12月16日(木)	5・6	演劇振り返り	

(3) 講師

平田オリザ(青年団主宰 劇作家・演出家)

わたなべなおこ(劇団あなざーわーくす主宰・劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC 代表理事)

森内美由紀(青年団・俳優、NPO 法人 PAVLIC)

宮崎 悠理(俳優、NPO 法人 PAVLIC)、河野 悟(俳優、NPO 法人 PAVLIC)

石本 径代(俳優、NPO 法人 PAVLIC)、有吉 宣人(俳優、NPO 法人 PAVLIC)

宮崎 悠里(俳優、NPO 法人 PAVLIC)、植浦菜保子(俳優、NPO 法人 PAVLIC)

北村 耕治(俳優、劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC)

(4) 対象生徒

1 学年生徒 96名 16 班編成

(5) 授業内容 (抜粋)

1 取材先を決める

演劇の班ごとに希望を取り、地域で様々な分野で復興に携わる方々の中から生徒達自身が取材希望先を選んだ。これまでお世話になった方々に加え、毎年地域との新たな繋がりも増えており、今年度は震災当時中学生だった方で、震災後に復興に携わる仕事に就いた方など、初めて取材を依頼した方もいた。

	FW先
1 班	鷺 周作さん(檜葉町・株式会社 J-Village)
2 班	松本佳充さん(双葉町・双葉高校元教員)
3 班	青木知里さん(東京電力福島復興本社)
4 班	下枝浩徳さん(葛尾村・葛力創造舎)
5 班	菅原文宏さん(富岡町・ホテルリーブス)
6 班	西村正夫さん、脇田伸吾さん (鹿島建設・中間貯蔵施設)
7 班	青木淑子さん(富岡町 3.11 を語る会)
8 班	鈴木謙太郎さん(木戸川漁協)
9 班	藤田 大さん(富岡町・鳥藤本店)
10 班	森雄一朗さん(檜葉町・ならはみらい) 森 亮太さん(檜葉町・喫茶ヤドリギ)
11 班	花井真里奈さん、大須賀勝之さん (東京電力福島復興本社)
12 班	清田彰一さん、水野静雄さん (鹿島建設・中間貯蔵施設)
13 班	平山 勉さん(富岡町・ふたばいんふお)
14 班	加井佑佳さん (東日本大震災・原子力災害伝承館)
15 班	秋元菜々美さん(富岡町役場)
16 班	木村紀夫さん(大熊町)

2・3 演劇オリエンテーション

まず4月に、チームビルディングのためのコミュニケーションWSを丁寧に行った(2.1.1 課題を知る学習)。演劇オリエンテーションでは、演劇を通して地域課題を知ることの意義について体験を通して学んでいった。身体を使ったゲームや、台本を使った短い演劇体験を通して、イメージを共有することの難しさや、人それぞれに価値観が違うことを楽しみながら学び、そこから福島の問題にも結びつけて考えた。震災後これだけふくしまに対するイメージが多様化してしまった今、正しいことを伝えようとしても言葉だけではイメージの共有は難しく、風評被害と闘うためには、伝え方を工夫しなければならない。その伝え方の一つとして「演劇」があるということ学んだ。



4・5 演劇創作のための取材・FW

演劇の題材を探す(地域の課題を発見する)ために、2回インタビューを行った。1回目は学校に来校いただき、時間をかけてインタビューを行った。そして2回目はFWとして生徒達が現地に赴き、インタビューで伺った場所を実際に見ることで、イメージの共有をするという形式をとった。



今年度で7回目となるこの取り組みだが、地域の方々の協力がなしには成立しない企画である。今回も様々な資料等を用意してくださり、FWの際には生徒達により伝わるようにツアーを組んでくださるなど、伝え方を工夫してくださった。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。生徒たちは、事前に調べ学習の中で考えた質問内容を演劇コミュニケーションWSにて更に掘り下げたのちにインタビューを行った。ただ用意した質問をするだけでなく、相手が答えた内容からさらにストーリーを引き出すことができた。さらに、2回目に実際に現地を訪れ、語られた言葉とその場所を重ねて震災当時に思いを馳せることができたことは、その後の演劇創作に真摯に打ち込む生徒達の姿勢に繋がったと感じる。

6～11 演劇創作WS

昨年度に引き続き、NPO 法人 PAVLIC わたなべなおこ氏をはじめとする講師陣と共に、生徒の状況を見ながら授業を組み立てた。取材内容を基に少しずつ演劇を通してイメージを形にしていく工程を丁寧に行った。演劇創作においては、脚本を書かずグループで話し合いながらその場でシーンを創りあげていくエチュード方式を取り入れた。書かれた言葉に頼るのではなく、その場で生まれる表現を大切に、全員で合意形成を図りながら創作をすることで他者と協働する力を伸ばすことをねらいとした。実際に、どの班も全員で協力しなければならず、班の中でも様々な対立や分断が見られたが、どの班もそれらを乗り越え、誰一人取り残さない姿勢が見られた。

「演劇を通して地域の課題を表現する」という正解のない問いに対してグループで一定時間内に答えをだす過程では、自分自身、班のメンバー、地域の課題とも徹底的に向き合うことを意味している。粘り強く向き合い続けた生徒達にはこの一週間で大きな成長が見られた。何よりも、チームビルディングから丁寧にWSを行ってきた成果か、生徒達が協働作業を楽しんでいた。



中間発表会では教員が審査員として入り、地域課題がより多角的・多面的に見えてくるよう、作品の中で足り

ないところをアドバイスした。視点は以下の3つである。

- ① 取材対象の心理描写だけでなく、地域課題がきちんと描かれているか。
- ② 取材対象に寄り添いすぎて、物事を一方向から見ているか。きちんと相手の背景も描けているか。
- ③ 取材相手が何者で、どのような仕事をしているのかが劇を見て分かるようになっているか。

中間発表会でのアドバイスを受けて、多くの班が追加取材をした。例えば、ある班は休校になってしまった双葉高校の元教員にインタビューをした。震災後各地にできたサテライト校を1箇所集約する際のやり取りと葛藤を演劇にした。すでに避難先で生活を立て直した家族からは、また家族がバラバラになってしまうと責められ、県教委には保護者への連絡を急ぐように言われ、先生自らも被災者であり避難者でありながら、板挟みに苦しむ様子を演劇にした。中間発表会でのアドバイスを受けて、当時の県教委にも葛藤があったはずだと、追加取材をすることにした。取材には、震災当時、県の学校経営支援課にいた方が応じてくださった。当時の県庁の混乱の様子や、サテライト校を作る際の思いや葛藤を聞くことができた。どちらにも立場があり、大切にしなければならぬものが違うからこそ対立が起きてしまうということを知り、生徒たちはとても悩みながら成果発表会に向けて作品をブラッシュアップしていった。この作品については、TBS ラジオの取材でこの班の作品と創作過程について取り上げていただいた。

参考 TBS ラジオ「アシタのカレッジ」
澤田大樹記者による取材報告
2022/03/11 放送(2:10:00～の部分)



中間発表の最後には、プロの講師の皆さんによる演劇を鑑賞した。演劇プログラムを始めて7年目になるが、これまで生徒たちは講師が舞台上に立つ姿を見たことがなかった。これは演劇プログラムが成熟し、我々大人に余裕ができたことにより実現したものであった。最後の教室のシーンでは、担任をはじめとする有志の教員が、生徒役で舞台上に立つというサプライズを行った。演劇が学校全体の文化として浸透した成果である。何も知らされていない生徒たちは教員の登場に大いに湧き、最後まで集中して観劇を楽しんだ。生徒の感想には「演劇は恥ずかしいと思っていたけど、先生たちの本気の演技は格好良かった。」「伝えたいことが観客に正確に伝わるように、私も恥ずかしながら堂々と演じたい。」といった感想が多く、これから成果発表会に向けて大きな後押しとなったと思う。



1 2 成果発表会

本校みらいシアターにて、成果発表会を行った。16班

16 作品を4グループに分け、グループごとに生徒達による投票を行った。評価の観点は以下のとおりである。

- ①テーマ (広く見てもらいたいと思う内容だった)
- ②発想力 (オリジナリティがあり、ユニークだった)
- ③セリフ (心に響く、印象に残る台詞があった)
- ④構成 (話の流れ、組み立て方が良かった)
- ⑤演技 (迫真の演技、役になりきっていて引き込まれた)

また、FW先をはじめ今年度お世話になった方々にも案内を出し、発表をご覧いただき、フィードバックをいただいた。今年度はイラクで人道支援をしている高遠菜穂子氏にも来校いただき、最優秀賞、平田オリザ賞、校長賞、副校長賞の他に、高遠菜穂子賞を選出し、表彰を行った。

	班	タイトル	FW先
A	3	トリチウム	東京電力
	11	出発点	東京電力
	14	加井物語	大熊町
	5	ホテルリーブスができるまでの道のり	広野町
B	1	人生なんとかなる！	J-Village
	8	Suzuki 物語	木戸川漁協
	7	語り部	富岡町
	15	10	富岡町
C	9	大さんの過去と休日	富岡町
	10	覚悟	東京電力(略)
	6	福島の裏側	中間貯蔵施設
D	12	清田's life with 水野	中間貯蔵施設
	13	富岡は負けん！	富岡町
	4	かづろうへ行こう！	葛尾村
	2	MANABU	双葉高校
	16	Don't Forget	大熊町

特に衣装や舞台セットなどはなく、全員がジャージ姿で演じるのだが、それでも情景が伝わるのは、演劇が様々なものを受け手が補完して鑑賞する表現であるからだ。生徒たちは、椅子や机などの少ない小道具を上手に使って防波堤や瓦礫、家、会社などを表現していた。演劇は、舞台上に立つ演者同士のコミュニケーションだけでなく、舞台と観客の間のコミュニケーションも成立しないと上手くいかない。4月からの演劇WSを通して、生徒たちの中に、受け手を想像し伝え方を工夫するという能力が積み上がっていると感じた。この力は次年度の未来創造探究でも活かされるだろう。

なお、今年度は記録映像を撮影した。本校の演劇プログラムが時間をかけて形になり、形に残すことができた。今後、様々な場面で本校の取り組みを伝える上で重要な資料となった。東日本大震災時に4、5歳だった生徒達が、当時の大人達と丁寧に対話し、取材した内容を演劇にすることで経験を自分事として表現した16作品は、後世に残る貴重な記録となるはずだ。

各発表の後、観劇いただいた取材対象の方一人一人からコメントをいただいた。

「東電が抱える課題を大変分かりやすく表現いただいた。

我々の今後の活動においても意義のある時間だった。今後
も一緒に考えていきたい。」

「インタビューの中で皆さんと話した、震災直後の入社時
の『被害者から加害者になってしまう』という葛藤を丁寧に
描いてくれた。当時はかなり悩んだが、この演劇を見たこと
が1つの答えになった。」

「震災を経験して10年、自分がどんな道を歩んできたのか、
皆さんの作品を通して振り返ることができた。現在の仕事
に就いて2年目だが頑張ろうと背中を押された。」

「取材を受けながら、自分の語り部としての仕事を振り返
った。語り部をしていることに対する町民の受け止め方も
違う。クレームの電話が来ると身構えてしまうと話したが、
そういった方々の声を聴き、一緒に考えたら良かった。とい
う気づきもあった。」

「私の家は帰還困難区域で除染もしてもらっていない。生
きている間に帰れるかわからない。この学校は、色々な思い
を抱えながら休校せざるを得なかった5校の生まれ変わり。
それを是非覚えてほしい。」

地域の方々も、演劇を通して自身のこれまでを客観的
に見つめる貴重な機会となっている。更に、震災直後
では考えられなかった、立場を越えた対話の場が生まれて
いる。震災から10年経ったからこそ話せることがある
と感じた。このプログラムが、生徒達だけでなく地域
の方々にとっても有意義な時間となっている。

1.3 演劇振り返り

成果発表会を終えて、これまでのプロジェクト全体を
振り返り、個人として・チームとして自分達がどのよう
に成長したのかを言語化するWSを行った。生徒の感想
は以下の通り。

・人前に立つこと、意見を言うことが苦手で、私一人が頑張
らなくても何とかかなと思ってた。演劇はそれではダメ
だと気付かせてくれた。自分の知らなかった物事、人の一面
を見ることでたくさんの発見をした。地域も人ももっと知
りたいと思った。

・震災で大きく生活が変わってしまった人の人生や、想い
を、演劇を通して深く理解することができた。この演劇があ
ったことで、町ですれ違う人に「あの人はどんな人生を送
ってきたんだろう」と、人の生き方に興味を持つようになり
ました。そこが成長したところかなと思います。

・震災のことを沢山学びました。自分が思っていた以上に被
害が大きく、目に見える被害だけではなくたのだとここ
に来て学びました。私は県外から福島に来て、福島のため
に何が出来るだろうと考えたときに、スポーツの力で双葉郡
に勇気・元気を届けることだと思っています。福島で学ぶ
以上、震災のことを正しく伝えられる人になりたいです。

(6) 振り返りと評価

昨年度と同様に、合意形成のトレーニングとして、全
員で話し合いながらの作品創作を行った。台本を使用し
ないことで演技は自然になり、より観客に伝わる伝え方
ができた一方で、昨年度は生徒達の興味・関心が取材対
象の個人的な葛藤に集中してしまうという課題があった。
その外側を取り囲む複雑な構造や対立・分断を描くため、

今年度は中間発表でのアドバイスを意識的に行った。地
域課題をより多面的に捉えるため、相対する側の話も聞
きたいと、追加取材を希望する班も多く、それによって
作品が深まった。

演劇創作は探究に必要な論理的思考と批判的思考の
トレーニングの場である。論理的思考は、演劇を作るこ
と自体が論理的に情報を出していないと相手に伝わら
ない。批判的思考は、時にはフィクションの力を使って
地域が抱える課題を掘り下げることだ。審査員の平田オ
リザ氏の言葉を借りれば、「探究」とは課題を探究するの
ではなく、「人間」と人間が作っている「社会」について
探究するものだ。人間の複雑さを深掘りすることが重要
である。取材をすると、どうしても取材対象に共感して
しまい、そのままに伝えたい！という気持ちが起るが、
そこで踏ん張って、その周りを取り巻く複雑な構造を深
掘りしてもらいたい。

福島で学び、原発事故、復興、トリチウム海洋放出問
題、様々なものをこれから背負わざるを得ない彼らが、
この不条理と闘うためには、大人の言うことを全て真に
受けるのではなく、批判的思考を持ってほしい。それが
演劇をつくる意味である。この経験を活かして2・3年
次の探究活動に生かしてほしい。

(7) 次年度実施への課題

地域で働く様々な方々の気持ちに寄り添うことができ
たことは大きな一歩ではあるが、やはり共感だけでは地
域の課題解決には至らない。震災時の年齢が低年齢化し
ている中、生徒達自身が地域の課題の本質に気付き、時
間を掛けてそれらを深掘りする中で基本的な知識をイン
プットしていく仕掛けが必要である。

※参考資料 「成果発表会の映像」

【平田オリザ賞】
15班「10」



【高遠菜穂子賞】
7班「語り部」



【学校長賞】
3班「トリチウム」



【副校長賞】
2班「MANABU」



【生徒投票最優秀賞】
16班「Don't Forget」



2. 1. 3 国際理解教育

本年の「地域創造と人間生活」は、キャリア学習を意識し、コミュニケーション力向上のためのスキル学習を土台として「自分を知る」、「地域を知る」、「世界を知る」の3本柱を軸として授業を構成している。「自分を知る」では、スタディサプリの活用やしくじり先生を通して、働くことの意義を考え、自己理解を図る。「地域を知る」では、フィールドワークを通して、双葉郡の現状と課題について知る・学ぶ授業を展開する。そして、「世界を知る」では、世界で活躍する外部講師を招聘し、世界における様々な課題を知り、生徒自身がグローバル社会の一員である自覚をもたせる (Global Citizenship Education)。

(1) 高遠菜穂子氏による国際理解講演会～概要～

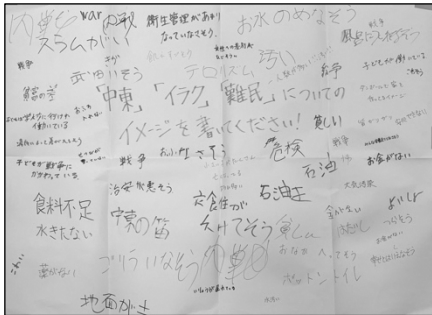
イラクで教育支援ボランティアに取り組んでいる高遠菜穂子氏に、『紛争地で起きていること～イラクが抱える課題事例から～』という演題で講話いただいた。

高遠氏の体験談を通して、地域が抱える課題を地域だけのものとして考えるのではなく、世界の平和や国際理解の意義を理解させることを目的としている。

- ① 日時 令和3年12月15日(水) 5, 6校時
- ② 講師 イラク支援ボランティア
エイドワーカー (フリーランス)
高遠菜穂子 (たかとお なほこ) 氏
- ③ 対象 本校1年次生徒、教職員

(2) 実施内容

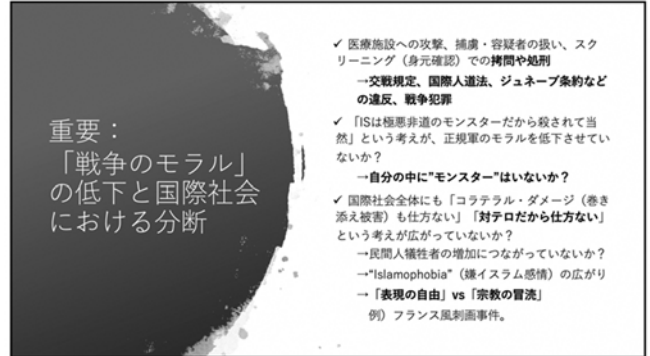
高遠氏には、前日の演劇成果発表会から参加していただき、審査員もしていただいた。発表会の際に、高遠氏から「中東、イラク、難民と聞いて、あなたが抱くイメージ」について自由に紙に書いてほしいという宿題があった。生徒達は壁に張り出された模造紙に自由にそのイメージを書いて



生徒達が演劇を通して学んだ地域課題の中に、分断や対立、福島に対する差別などがあり、それらの出来事に苦しむ地域の方々へ心を寄せてきた。そんな生徒たち自身の中にも少ない知識と偏った情報により、中東・イラク・難民に対する差別を作り上げてしまっているということを知った。「物事は多面的である。少ない情報から得るイメージが全てとは限らない。偏見や差別はそこから始まってしまいがち。そして、それらは戦争の素なのです。」という高遠氏の言葉は、生徒達に深く刺さったはずである。

イラク支援を事例に、復興の現状と課題についてお話いただいた。戦争と難民の問題について、「人道危機」と報じられる時には大抵事態は泥沼化していることや、報道は「点」でしかなく、時々しか出てこない点と点を繋げて結論を出すのはとても危険であること。大切なのは点と点の間にある経過を知ることだということを知った。世界で起きていることをなるべく自分の力で知ろうとすることや、そのためには日本のメディアだけでは情報は圧倒的に足りず、海外のメディアに頼るしかなく、それ

には英語が絶対が必要であることなどを生徒達に訴えた。



また、広い国際社会の中で平和に共存していくためにはお互いをもっと知らなければならないことや、非暴力の解決方法は対話によってしか生まれないという結論から生まれた高遠氏の現在の活動 (絵本の読み聞かせや演劇WSなど) にも触れ、本校で行っている演劇プログラムの感想も交えながら、一緒に世界を平和にしていましましょうとお互いの活動を称え合った。



(3) 生徒の感想

- ・日本は平和だ、戦争に関わりはないと心のどこかで思っている節があった。海外に目を向けるのは勿論、日本についても知るべきだと思った。
- ・事前に高遠さんがイラクで拘束された時の記事を読んだ。日本国民の激しいバッシングがあったと知った。今回お話を聞いて、それが無知ゆえの行動だと思った。もっと自ら世界の問題に目を向け、批判するにもしっかりと知識を身につけた上で行動したい。
- ・自分がどれだけ世界に対して無知なのか思い知らされました。日本、そして福島への偏見があるように、中東やイスラム圏への偏見・差別が少しでもなくなるように、世界の現状を自分事として理解することはとても必要なことだと思いました。

(4) まとめと今後の展望

最初に行った宿題は、偏った知識によって生まれる偏見を自分事に捉えるという、若干荒っぽいやり方ではあったが、生徒達は自分達の中にある偏見に気付くことができ、衝撃的な体験となった。その後の講話は、イラク復興と双葉郡の復興を重ねながら聴くことができた。ここで感じたことを受けて、まずは身近な社会から変えていけるよう、生徒の能動的市民性を育てていきたい。

2. 1. 4 探究接続

二年次から始まる未来創造探究とのスムーズな接続を図るためのプログラムを年度後半に実施した。昨年同様、コロナによる影響は大きく、講師を招聘しての講義やワークショップ、対面による活動はできず、オンラインによる対談や、探究への導入段階となるような夏季休業中の課題に取り組みせるといった機会を通し、探究への意識づけを図った。

(1) はじめに

1年次で履修する地域創造と人間生活は、二年次以降の未来創造探究への準備として位置づけられる。地域課題等を未来創造探究につなげ、より深い学びを可能にすることができる。一方、年々、先輩方が行ってきた探究活動がより多様化、発展化していることから、探究活動自体への不安を持つ生徒も少なくない。この実態を踏まえ、次のようなプログラムを実施した。

(2) 実施内容

① 2月2日（水）テーマ検討ワークショップ

探究テーマとは何か、という確認をしたうえで、前述のとおり、探究への不安や疑問を少しでも解消し、1年次での取り組みを円滑に探究に生かせるよう設定した。

事前にアンケートを実施、探究について思っていること、印象をあげさせた。多くの生徒が、何をしてよいかわからない、先輩方のような探究ができるのかどうか自信がない、双葉郡に限定したテーマでないといけないのか、といった不安をあげていた。そのような生徒の声をもとに、探究の意義の再確認と、卒業生、カタリバスタッフとのオンラインによる対話を行ったのが本事業である。

■みんなと考えたい問い

そもそも「探究」とは？

探究をして良いことあるの？

未来創造探究って何？
地域って何？

探究を進めるにあたって大切なことは？



初めに担当教員より探究活動の意義や、2年次・3年次へのつながり（深化）について確認した。その後、担当教員、卒業生（4期生 M・K さん）、カタリバ横山氏の三者対談へと進み、M・K さんの探究へのきっかけやその後の取り組み、その中で自分がどう変わっていったかという内面の変化までを語っていただいた。まとめとして、M・K さんは後輩たちに「身近なところから始めてよい」「そこで生まれた興味と地域の課題が最終的に結びつくこともある」など、経験に基づいた道筋を示していただいた。

(3) 成果

生徒からは「探究活動が身近に感じられ、不安が軽減された」、という旨の意見があがり、非常に前向きなかたちで終えることができた。授業後にはさらに質疑の時間を設け、多くの生徒が、具体的に自分のやりたい探究に関するアドバイスを求めるなど、制限時間いっぱいまで質問をしていた。これから探究へと進むこの時期に、より具体的な流れを示せた、という点で有意義であったと思う。

(4) 課題と展望

新型コロナにより、開催時期の調整が難航する事態もあるが、対面・オンライン問わず、具体的な指針を生徒に示し、適切な時期に開催できることが、本事業の大きなポイントとなると目される。

2. 1. 5 キャリア教育

本校の地域創造と人間生活（産業社会と人間）の3つの柱「自分を知る」「地域を知る」「世界を知る」は、生徒が自らのキャリアを考えるために重要な要素となっている。3本柱を通じて、年間を通して生徒には自らのキャリアについて考えられるようにしている。特に年度後半の時期に、高校卒業後の進路のみならず、将来どのような生き方をしたいのかを考えるきっかけとなる機会を設定した。

(1) はじめに

演劇のためのWSと重なる部分もあるが、オンラインでのPAVLIC講師の講話、並びに生徒同士での対話を通し、自らのキャリアについて考えさせるプログラムを実施した。「人生グラフ」作成のプログラムにおいては、生徒自身が自らの人生を振り返り、他者に自らの人生を話し、また他者の「これまで」と「これから」を聞くことで、自分のキャリアプランニングのきっかけとなる機会となった。

(2) 実施内容

① 2月3日（水）しくじり先生

昨年度に引き続き、本校教員による講話、対話を行った。対話に参加してもらった教員には、人生の転機、苦しかった・辛かった時期などを具体的なエピソードとともに語ってもらった。これからのキャリアに向けて一歩を踏み出せないでいる生徒が、自分から一歩を踏み出せるよう、教員には失敗を含めた踏み込んだ自己開示をしてもらった。その結果、生徒は教員が経験した失敗や挫折から奮起に勇気をもったり、同じような悩みを抱えていたことに共感したりしていた。



② 2月2日（水）マインドマップ講座

内山雅人氏による、実技を交えた講話をオンラインで行った。マインドマップの具体的な活用方法、それをもとにどのような効果が得られるのか、などを教授いただいた。探究活動に向けた、各自の思考の整理、視覚化を目指したものであるが、日ごろの学習方法といったところにも活用できる、という点でも、生徒たちは興味を持ち、また熱心に取り組んでいた。



(3) 成果

教員への印象の変化、同じ悩み、似た性格を感じ取り親しみやすさを感じたほか、これからの動き出し（カタリバの活用や進路意識の具体化）が見られた。特に、自らが失敗を恐れず、挑戦を続ける姿勢を感じられたことは、成果として大きいと思われる。

(4) 課題と展望

キャリアへの取り組みは、3年間継続して行われるものであり、適切な時期に行われなければならない。進路指導部や探究活動とのつながり、将来への見通し、今後の社会変化なども踏まえ、教員、スタッフが柔軟に対応できるか、という点が課題といえる。

2. 1. 6 「未来創造探究への接続」の観点から見る「地域創造と人間生活」

本校では本事業の指定を踏まえて、令和3年度より学校設定科目「地域創造と人間生活」を開講した。これまでは「産業社会と人間」が開講されていたが、時代背景に合わせた刷新、また2年次への接続強化を目的として、より3年間のカリキュラムを有機的に繋げていく意図を込めて新たに開講した。

各プログラムの詳細は各頁に任せ、本頁では2年次から始まる「未来創造探究への接続」という観点から見た際の要素を記述する。

(1) 「地域創造と人間生活」について

「産業社会と人間」は総合学科の課程では入学年次の必須科目となっているが、指導要領上では「勤労観、職業観の育成」や「各教科・科目の履修計画の作成」が大きな目的となっていた。これまでの本校における課題として、2年次から始まる「未来創造探究」への接続の弱さが挙げられていたこともあり、科目の目的を再整理する意味も込めて、本科目を新たに開講した。

(2) 複眼的視点から課題の本質を掴む「クリティカル・シンキング」

今年度の演劇プログラムでは、追加インタビューを行った班もあった。特に最初にインタビューした人とは異なる立場にいる人の話を聞いた班もあり、複眼的視点から地域の有り様を観察している様子が見られた。2年次の未来創造探究で地域課題解決の実践を行っていく上で同様の観点は重要であると言える。地域や社会で起きている問題の原因の多くは、多様な立場の人が関わっており複雑である。その中から課題の本質を掴もうとする思考（クリティカル・シンキング）を育むことに繋がっていると考える。

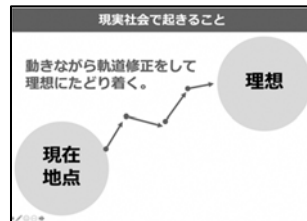
(3) 解のない問いに向き合うための学習姿勢「AAR サイクル」を育む

2年次に控える未来創造探究ではいわゆる「解のない問い」に向き合うこととなる。机上の空論で終わらせず、複雑な地域社会での実体験を通して学ぶこととなるため、想定外のことが起こる。その際に求められる学習姿勢が「AAR サイクル」である。AAR サイクルとは「Anticipation＝見通し」「Action＝行動」「Reflection＝振り返り」の略で、「OECD ラーニング・コンパス 2030」で提唱されている学習姿勢である。精緻な計画を作成・実行していきながら、仮説を持ちながら試行錯誤や軌道修正していきながら、目標へ近づいていく。

ただ、生徒はこの学習姿勢に慣れていないことが多く、

2年次では例年、「うまくいくか分からないから実践できない」といったような様子が一定数見られた。

「地域創造と人間生活」では、AAR サイクルを定着させるため、「プチ探究」や「しくじり先生」を実施し、「まずは実践に移すこと」や「思い通りにいかなかった経験から学ぶこと」という体験を図っている。

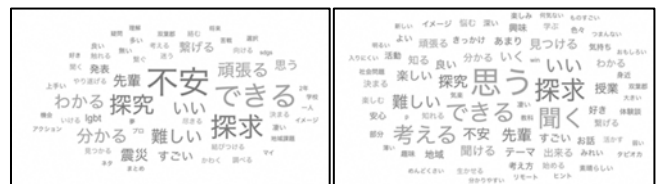


プチ探究において、
失敗は存在しない

(4) 年次横断化によるシームレスな探究テーマ設定

これまでは年次で区切りとなるため、本来繋がるはずの1年次で取り組んだ学習内容が繋がりがづかった実情があった。そこで昨年度より、2年次から始める探究テーマ設定を数ヶ月前倒しして、1年次から「プレオリエンテーション」を開始している。自身の気になる Will/Need キーワード（マイキーワード）の洗い出し、初期調査の基となる「小さな問いづくり」までを行い、あえて学習内容を年次で区切らないことで、シームレスに接続させようとしている。

また探究テーマ設定までの過程を丁寧に踏めることにより、2年次に臨む上での不安や疑問が解消される様子も見受けられる。



※左：プレオリエン前の感想／右：後の感想

右の方が好意的なワードが増えている

2. 2 未来創造探究（2年次）

2～3年次の「総合的な探究の時間」では、地域の問題の解決に向けた実践プロジェクトを創出する。本校で「未来創造探究」と呼ぶその授業において、生徒は自らの興味関心に従い、「原子力防災探究ゼミ」、「メディア・コミュニケーション探究ゼミ」、「再生可能エネルギー探究ゼミ」、「アグリ・ビジネス探究ゼミ」、「健康と福祉探究ゼミ」、「スポーツと健康探究ゼミ」の6つからひとつのゼミに所属して探究活動を行う。オリエンテーションでは自分の興味・関心（Will）や地域の課題（Need）について考えたうえで、ゼミ選択を行った。

2. 2. 1 探究オリエンテーション

（1）はじめに

本年度は「問いの設定」と「調査方法」を年度当初の主な目標とした。まず、探究を進める上で大変重要な「問いを立てる」練習に重きを置きながら、自立して調査を進めることができるように、学校図書室での文献の検索方法やインターネット検索時の注意点等について情報提供を行った。

（2）実施内容

まずは問いのワークから始めた。前年度担当者からのアドバイスにより、探究を進めるにあたって一番必要となるのが、「問いの設定」ということであった。高1年次の後半から、少しずつ自分のテーマについて考えてはいるが、それを問いの形で整理しないことには、探究が進まない。「問い作りブラッシュアップ」と称し、まずは「閉じた問い」と「開いた問い」を行ったり来たりしながら、できるだけ多くの問いを作る練習を行った。題材としては、高1年次の最後に行った「ヒューマン・ライブラリー」という地域で活躍する人のお話を聞いた際に残っていたワークシートを元に、自分が興味ある内容に絞り、それを別の生徒と議論を重ねながら、問い作りを行った。

次に行ったのは、「調査の方法」についてである。「問いの設定」の次に大事になってくるのが、調査アクションである。これも前年度担当者からアドバイスがあり、「調査する」というと生徒は安易にインターネットに頼る傾向があり、書籍等の文献を参考にすることが少ないという指摘があった。そこで、今年度は「問いの設定」がある程度できた生徒から、学校図書室での文献検索の方法や、インターネット（特にGoogle検索）検索時の注意点について話をした。特に強調した内容としては、文献調査とインターネット調査それぞれのメリット・デメリットである。安易にインターネットに頼る危険性と文献調査の信頼性の両面を伝え、合理的な調査方法の使用を推奨した。ちなみに、この時期はちょうどゴールデン

ウィーク直前で、休暇中の課題として自分の探究テーマに合った文献を1冊選び、その報告をするというのを課題とした。

ちなみに、この「問いの設定」と「調査方法」のワークが終了したのち、自分の興味関心に基づき、6ゼミ（「原子力防災探究ゼミ」、「メディア・コミュニケーション探究ゼミ」、「再生可能エネルギー探究ゼミ」、「アグリ・ビジネス探究ゼミ」、「健康と福祉探究ゼミ」、「スポーツと健康探究ゼミ」）の担当者と面談し、所属ゼミを決定していくという流れになる。

（3）成果

オリエンテーションとして問いのワークをすることで、探究テーマについて深く考えるきっかけを作ることができ、その後のゼミ選択への円滑な移行に繋がった。また、調査方法特に文献調査の薦めにより、本を読もうという意識が少し向上したようである。

（4）課題と展望

この年の12月に宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校に視察をした際、担当者の方から「探究が進むのは問いのワークの際の逡巡の後に爆発した時です」という言葉が脳裏を離れない。本校では問いのワークをそこまで突き詰めてやらなかったが、とことん問いと向き合うことの大切さを、後から感じている。本校と連携している早稲田大学の研究員の方も「良い研究ができるかどうかは、納得いく問いが立てられるかどうかです」という話に通じるところがあり、改めて問いの大切さを感じた。これは生徒だけでなく、生徒の伴走者となる各ゼミの担当者についても同様で、問いの大切さをいかに共有し、各ゼミ担当者も生徒の探究に関連する問いを磨くために伴奏できる仕組みや環境を整えることが大切だと感じている。

2. 2. 2 進路探究 キャリア学習

本校の「未来創造探究」は、水曜日の5・6校時と木曜日の3校時に設定されている。木曜日の授業は、探究に関する知識のインプット学習と進路に関する学習の2つの側面で行われた。インプット学習については、主に福島の抱える課題を社会科学的及び自然科学的な観点から捉えた。また、進路に関する学習については、小論文や志望理由書、セルフエッセイ作成を通じ、自分の進路について深く考える時間とした。

(1) はじめに

今年度は水曜探究2時間と木曜探究1時間の連携・往還を深め、探究と進路については教科学習の意欲が高まるよう、関係部署による連携を綿密に行った。

(2) 実施内容

前期（4月～9月）の前半は、まだゼミの所属や探究内容も明確ではないため、地域の課題として福島や日本が抱えている課題を取り上げ、水曜日5・6時間目で各自が行う探究活動における、テーマ設定・問い設定の助けとなるよう、授業内容を設定した。

例えば、社会科学的な視点からは、処理水の問題、メディア報道のあり方、過疎化・高齢化問題、自然科学的な視点からは主に放射線について理解を深め、それについて簡単な議論も行った。

また、前期の後半においては、探究に行き詰まる生徒も散見されたタイミングを見計らい、SDGs という観点で、全世界的な課題を復習しつつ、日本の課題の特徴を捉え、また、課題は独立して存在するのではなく、様々な問題と関連を持ちながら存在することに目を向けることで、視野を広く持たせ、より自分の興味関心のある課題について理解を深めるきっかけを作った。

後期（10月～）になると、生徒の探究テーマ・問いもある程度決まり始め、解決のためのアクションも少しずつ実践されるようになり、各生徒が自分なりの目標・方針を定めて進み始めた。そこで進路探究では、生徒の進路意識の向上を目指し、まずは小論文および志望理由書作成の講座受講、模試受験およびリライトによる文書作成を行った。四年制大学・専門学校進学希望者には小論文を、就職希望者には志望理由書の作成をしてもらい、まずは実際の文書作成の練習を、数週間に渡って行った。

志望理由書の作成においては、業者が提供する自己診断適性検査の結果も参考にし、自分の適性（コンピテンシー）・長所等を客観的に見つめることで、深い自己理解に努めさせた。

また、年が明けた後期の後半（1・2月）においては、

年度末に近づいていることを踏まえ、進路意識をより明確にしていくために、セルフエッセイの執筆に取り掛かった。セルフエッセイとは主に探究活動を通じた自分なりの生き方・在り方について、「書き手自身の個人的な知識や体験を基にし、読み手を説得するような、自分なりの意見を所定の書式に従って書くもの」である。セルフエッセイは昨年度まで3年次で書いていたが、進路意識の向上と、3年次4月における中間発表会に向けた準備の一環に位置付けたため、今回は2年次で実施した。

(3) 成果

水曜日5・6校時との連動を毎回意識したカリキュラム・マネージメントができた。生徒の学習の様子や学期・行事を十分に考慮しつつ、単発あるいはその場限りの内容ではなく、探究活動を深め、進路意識を高めるのに資する内容を提供できた。

特に、セルフエッセイの作成においては、偶然ではあったが、後期の期末考査（学年末考査）が終了し、毎年本校で行われる3.11 東日本大震災追悼式の時期に近い時に実施したため、想いを新たにして書く各生徒も少なくなかった。

(4) 課題と展望

木曜日3校時のゼミ担当者の意識がやや低くなってしまっているのが問題である。水曜日5・6校時は各ゼミ主導なので、主体的な運営がなされる一方で、木曜日3校時は年次（学年）主体になるため、ゼミ担当者の意識が薄れる傾向が出てしまう。進路希望を把握している担任と、専門的な観点から探究内容を把握しているゼミ担当者とは、縦と横で紡ぐ網の目のように生徒理解に努めていくことは、大きな化学変化をもたらす可能性に満ちているため、このつながりを多く作ることができるような戦略を様々な場面で考えていくことが重要であろう。

2. 2. 3 ① 原子力防災探究ゼミ

今年度の2年次は23名の生徒が原子力防災探究ゼミとして活動を行なった。例年に比べ、グループで同じテーマに取り組むという形態が減り、個人で設定したテーマに取り組む者の割合が多くなっている。地域コミュニティの再生を中心とした、原子力発電所事故後の地域社会のあり方について探究するというのがゼミ全体のテーマであるが、ゼミを選択してきた生徒の興味・関心、課題の捉え方は必ずしもそれとは合致しなくなってきている。

(1) はじめに

今年度、原子力防災探究ゼミでは、生徒個々の興味・関心を出発点としたテーマ設定を重視した。一般的に地域の課題だと認識されているものを、半ば自らの興味・関心が地域の抱える課題の解決にどのように生かせるのかという視点で、多くの生徒がテーマ設定を行なっている。例年以上に、テーマは細かく分かれ、23名で18プロジェクトが進行している。複数で取り組んでいるプロジェクトも2名がほとんどで、それ以外は個人でテーマを設定して活動を行なっている。

(2) 実施内容

生徒個々の興味関心に基づくテーマということもあり、教員側からの一斉講義形式でのインプットはあまり行なわず、基本的に生徒の活動に対する教員のフォローは個別に行なっている。生徒ごとの担当教員も設定していない。生徒は毎回、その日の自らの活動を振り返る時間をとっている。それにより、時間の経過とともに自らの探究活動がどのような経過をたどってきたかを後に確認できるようにしている。また、振り返りにより、次の活動でこういった取り組みを行うかの見通しを立てる。

生徒相互が地域の課題や自ら設定した課題についてゼミ内で意見を交換する機会を確保したいと考え、テーマ設定の時期には、自らの理解が不足しているキーワードを自覚する機会を設けたり、テーマ設定後にはお互いのテーマやプロジェクトについて共有したりする機会を設けている。

(3) 成果

テーマ設定はお互い異なるが、お互いのプロジェクトに協力しあう生徒の姿も見られる。個々で設定したテーマはぶらさずに、仲間の助けが必要なときや、情報収集として有益な機会には、テーマを超えて協働している。具体的には、地域の子どもたちを集めたイベントを開催する際に、ゼミ内の別のテーマで探究を行なっている生徒が当日の運営に協力をしたり、地域の方へのインタビ

ューを行う際に一緒にアポイントメントをとり、同じ機会にそれぞれのテーマに関する情報収集を行ったりという動きである。

また、調査のために学校の外へ積極的に出ていく姿や、継続的に地域の方々の協力を得る姿は例年以上に多く見られた。学校外での活動については、コロナの影響でやりにくかった時期もあるが、そうした時期においてもオンライン等を積極的に活用し、地域の方々と繋がろうと努めていた。地域内でもやや遠方の方とのコミュニケーションについてもうまくオンラインを活用できている。

他のゼミの知見を生かして地域課題の解決にあたりと、ゼミをまたいだ協働も見られている。

【主なテーマ・プロジェクト】

①子どもたちが自信を持って自分の気持ちを表現できる地域づくりを目指し、チアを活用した居場所づくりの探究を行っている。地域の小学生向けの5回シリーズのチアスクールといわきFCホームゲームでの披露の場を組み合わせた「地域チアアップチャレンジ」を企画・実践した。双葉郡内の小学生14名が参加し、女子児童の習い事が少ないという双葉郡の潜在的ニーズも明らかとなった。子どもたちが自信をもって表現する力の育成や、チアを通じた地域のつながりの創出を目的として活動しており、その効果もアンケートで測定し、有効性を確認している。現在、次なる取り組みを検討している。

入場無料 事前申込制 (定員:15名)

イベント日程 /

- 第1回 10月9日(土) 9:30~11:30 練習会ふたば未来学園 地域共同スペース
- 第2回 10月17日(日) 9:30~11:30 練習会みなみの交流館ならはCanvas
- 第3回 10月24日(日) 9:30~11:30 練習会@富岡町文化交流センター学びの森
- 第4回 10月31日(日) 時間未定 11月8日に掲げのりハーサル予定
- 第5回 11月3日(水・夜) Jヴィレッジで行われる「いわきFCvs東京蹴球」の試合前パフォーマンスに参加!

この日程のうち、練習会に一回でも参加していただければ11月3日のパフォーマンスにも参加できるのでご相談ください!

【申し込みについて】

- ①右のQRコードを読み込む
- ②フォームに必要事項を記入
- ③申し込み完了!

(後日確認メールをごちから返信します)

プロジェクトについて

「Let's cheer up ふたばプロジェクト」とは、ふたば未来学園高等学校の実践がより広まるための、ふたば未来学園の「チア」を軸とした、地域の子どもたちを巻き込んで、活動を通して地域社会の活性化を図ることを目的とした取り組みです。

練習の持ち物

- 動きやすい服装
- 水分
- 運動靴(中履)
- タオル
- 練習用具
- チアを楽しみたい方の実音!!

その他

ご不明な点がございましたら、お気軽に「cheer_futaba@gmail.com」にてご連絡ください。皆様のご参加お待ちしております。

主催 Let's cheer up ふたばプロジェクト
責任者 ふたば未来学園高等学校2年 松岡 千尋(cheer.futaba@gmail.com)



「Let's cheer up ふたば!!」プロジェクト活動における方針



②原子力防災探究ゼミと再生可能エネルギー探究ゼミのメンバーが協働でプロジェクトを行なっている。再生可能エネルギーを用いたイルミネーションの設置により、地域の安全や安心をはじめとした、地域の明るさを取り戻す探究を行っている。原子力防災探究ゼミに所属する生徒が1年生の時に、学校を明るくしたいと学校敷地内のクリスマスイルミネーションを提案して、実行したことがきっかけとなっている。昨年の3月11日には、広野町の『3.11 復興 10周年を心に刻むライトアップ&祈りのスカイランタン』に参加してライトアップによるまちづくりの可能性を感じるとともに、ボタン電池等使い捨ての電源ではなく、持続可能な社会に適した、電源の工夫も出来ないか考えていた。

一方で再生可能エネルギー探究ゼミに所属している生徒3名は、地元広野の川を生かした小水力発電の可能性に関心を持ったり、浪江町の水素ステーションを見学したりして、再生可能エネルギーを生かした社会づくりを考えていた。

この両者が出会い、再生可能エネルギーによるライトアップで町の明るさを創出しようと取り組んでいる。取り組みに際しては、地域の方々から現在家庭で使っていないイルミネーションの寄付を受け付けるとともに、広野町、いわき市のNPOと連携して、それらの団体が主催するイルミネーションイベントへも協力するなど、お互いに共同する関係を築きながら着々と実践を重ねている。



(4) 課題と展望

本ゼミでは、原子力発電所事故後の地域社会のあり方について探究することがゼミ全体としての大きなテーマとなっている。具体的には、廃炉の進め方や汚染水の処理方法等、事故後の様々な処理について地域がどのように関わるべきなのか、避難や期間の過程で生じた対立や分断をどのように解決するのか、避難により断絶してしまった地域コミュニティをどう復活させるべきかといった課題に取り組み、解決に向けて実践することを想定していた。

実際には、地域の分断や地域コミュニティの再生に向けた取り組みは見られるが、廃炉や事故後の処理についてテーマにする者は現在ほとんど見られない。生徒の興味・関心を出発点としてテーマを設定しているため、仕方がない面もあるが、この地域が今後数十年と向き合っていく廃炉や事故後の処理について生徒らが関心のない現状については、危機感を抱くところでもある。一方で、各種団体のワークショップ等で廃炉等について学んだり、同世代の仲間と対話したりした生徒には、「これまで知らなかったり、避けてきただけで、廃炉や事故後の処理はこの地域の課題であり、自分たちの声も届けなくてはならない」といった感想を持つ者も少なくない。これらについて生徒らが学ぶ機会が乏しいという現状を改善していく必要がある。

また、「活動」したことで満足することなく、その活動が、理想の地域や、地域の課題解決にどのように資するのかを常に確認することはゼミ全体として徹底したい。

2. 2. 3 ② メディア・コミュニケーション探求ゼミ

メディア・コミュニケーション探求ゼミ（以下MCゼミ）は、双葉郡を中心とした地域が抱える課題に対し、情報の発信（デジタルマーケティング）や過去の記録（アーカイブ）といった手法を通して、その解決に寄与することを目的としている。その取り組みには、地域の魅力や特徴を効果的に発信して興味を抱いてもらうという外的視座、震災等のつらい経験を教訓として地域で共有し同じ苦しみを繰り返すまいという内的視座の両面が想定される。

MCゼミを構成するメンバーは30名で、その内訳はアカデミック系列生20名（女16、男4）、スペシャリスト系列生10名（女9、男1）となっている。一人で活動に取り組む者も多いが、テーマの近いもの同士、またはテーマの方向性が違うもののその手法に類似点があるもの同士でグループを形成し、各々のペースで探究活動に励んでいる。

（1）はじめに

震災について「ほとんど覚えていない」と本ゼミ生の大半が語る。これは、震災当時彼らが未就学児であったことに起因する。これまでの探求では、自身の経験した「ストーリー」に基づいたテーマ設定が主であったが、これまで家庭や学校で得た学び・双葉郡の地域課題について考察した高校1年次での活動などによる、客観的知識に基づいたテーマ設定が顕著となる。伴って、彼らに寄り添う我々アドバイザーの関わり方も、柔軟な変容が求められる。



前述のことに由来して、本年は、震災・原発事故からの復興や風評被害の払拭といったテーマが減少し、双葉郡の魅力の開発・発信や、他地域も抱える課題に対し双葉郡を活用して解決に取り組むなど、多様なテーマが設定されている。一見立派なテーマであっても、考察が表面的である可能性に留意し活動を進めた。

最後に、今年も続いた新型コロナウイルスによる制限は、本ゼミにとって非常に悩ましい課題である。現場に足を運び、様々な人間と関わりあうことが必要条件であるため、我々をはじめ彼らも機会の確保に非常に苦慮している。その制限の中で得た貴重な機会に、細かい分析と深い考察を加え、活動を進めているところである。

（2）実施内容

【Ⅰ：ゼミ選択期】

年次全体で取り組んだ「問いづくり」によって、ある程度テーマの構想が見えている状態でのゼミ活動スタートとなった。構想はあるものの、迷いのある学生も多数いたため、一人一人と丁寧に対話しゼミとの適切なマッ

チングを模索した。その結果、当初40名弱集まった本ゼミであったが、他ゼミへの異動により、現在の30名体制となった。

【Ⅱ：導入期 ～指定課題の調査アクション】

集まった彼らの想定しているテーマは幅広く、双葉郡の魅力発信という本ゼミらしいものがある一方で、商品開発や楽器演奏・古着活用など、必ずしも震災というテーマと直接結びつかないものが散見された。そのため、まずは本ゼミが想定している活動に目を向けてもらうべく、こちらが指定した課題についての調査アクションに取り組ませた。指定課題と選択した人数は下記である。

- | | |
|----------------|------|
| ① 「メディア」とは | 6名選択 |
| ② 「コミュニティ」とは | 3名選択 |
| ③ 「アーカイブ」とは | 8名選択 |
| ④ 「風評」とは | 7名選択 |
| ⑤ 「双葉郡の食品」について | 6名選択 |

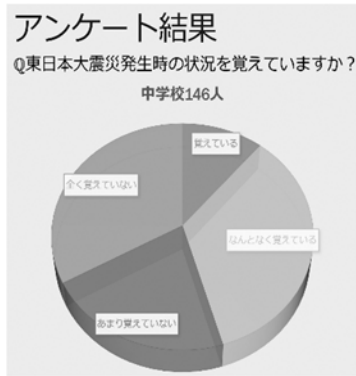
調査結果は、パワーポイントなどのスライドを用いた「プレゼンテーション形式」で発表することとした。これは、収集した情報を他者に伝えることで、知識を根本的に理解してほしいという願いと、探究発表会に向けた練習もかねての取り組みである。発表はグループで行ったが、模範的であった生徒1名を選出し、全員の前で発表させて共有した。



【Ⅲ：テーマ決定期 ～自由課題の調査アクション】

前述の活動を踏まえ、テーマ決定に当たっては「双葉郡」というキーワードに触れるように指示をしたうえで改めてテーマを再構成するよう求めた。各々の設定したそれらのテーマに基づいて、自由課題の調査アクション

に取り組ませ、指定課題同様にプレゼンテーション形式での発表により、お互いの学びを共有した。この場面で発表させた背景には、調査アクションの推進はもちろんであるが、科学的エビデンスに基づいた説得力ある



論を構成する経験値を高めるといふ目的も内包している。分科会形式での発表の後、各分科会で代表者を選出し、代表者のみ全体の前で発表させて共有した。

＜テーマの決定＞

例年取り上げられる風評の払拭や後世への東日本大震災の伝承に加え、地域の魅力をアニメや動画で発信する活動、さらには女性の生理問題やフードロス問題・ゴミ問題などについて双葉郡を舞台に解決していく活動など、彼らの個性が顕れる幅広いものとなった。

【IV：活動前期 ～解決アクション】



ここから、各々の探究活動が本格化する。効果的な解決方法を模索するためアンケート調査を行う者、発信するための絵本製作や調理を行う者、地域の魅力を見つけるために様々な

地域施設を訪問する者、自身のテーマに関するスペシャリストとの繋がりを得る者など、テーマの解決仮説を得る活動が多く見られた。また、テーマの類似性などからグループの解体・離脱なども積極的に行われた。

【東日本大震災・原子力災害伝承館 訪問】

本ゼミ生全員で、東日本大震災・原子力災害伝承館を訪問する機会をいただいた。そこでは、語り部さんの体験談の聴講と館内視察を行った。多様な展示物を網羅するには時間の制約が大きかったため、事前に館内の情報を共有し、自身のテーマに沿った観覧コースを予め絞ったことで、各々が有意義な時間を過ごすことができた。これをきっかけに、テーマの再構築を行う学生もいた。



(3) 成果

【A：地域課題への理解】

自ら調べ、外部の方とコミュニケーションをとり、考察を続ける中で、これまで得てきた地域課題に関する知識が表面的であったことに気づくことができたようだ。特に、双葉郡8町村が震災からの復興や風評の払拭、地域の魅力発信のために様々な取り組みをすでに行っていること、他方では自分のテーマに関して先行的に実践している方がたくさんいることなど、驚きであったようだ。

【B：課題解決への実践】

活動前期である今年度でも、積極的に解決アクションを行う学生が見られた。例えば、生理問題について取り組む学生は、校内のトイレに生理用品を設置して意見を集めた。アニメで聖地巡礼と題したチームは、作成したキャラクターをSNSで広く一般に拡散し、名前の公募を行った。ここまでの進捗がなくとも、テーマに関するプロフェッショナルと繋がり、先方の活動に参画するなどして解決への道を歩み続けている。

【C：学生の資質】

数回行った発表を通し、得た知見について論を整えアウトプットする能力が身についた。また、活動が進むにつれて、意見等の反応を得た生徒は、他者に何らかの影響を及ぼすことができたことに喜び、社会の一員としての市民性の獲得と社会貢献への意欲の喚起が見られた。



(4) 課題と展望

夏季休業中の蔓延防止等重点措置、冬季休業中のオミクロン株の発生等により、今年度は彼ら自身が思い描いた活動ができずに苦慮している。一方、来年度の前期は

【活動後期】である、探究テーマの結論を得るべく、活動による材料収集を終えなければならない。この制限が解除される明確な基準がない以上、この制限の中で活動を進めることを想定することが必要となる。

探究を深めるにあたっては、他者との関わりは必須であるため、活動の在り方や方法を工夫して行動制限下でも実践できるよう運びたい。また、数少ない活動機会をより有効に活用できるよう、広い分析と深い考察ができるよう、生徒に寄り添いながら今後進めていきたい。

2. 2. 3 ③ 再生可能エネルギー探究ゼミ

東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故による災害から10年が経過し、再生可能エネルギーを取り巻く環境は大きく変化している。2050年に向けたカーボンニュートラル、コロナ感染拡大に伴うエネルギー消費の分散化など、脱炭素実現のために再生可能エネルギーが果たす役割は尚一層着目され、導入拡大への具体的取組みが求められている。また、福島県では2040年頃を目途に県内エネルギー需要の100%に相当するエネルギーを再生可能エネルギーから生み出す目標を掲げている。

本探究ゼミでは、相双地区の復興状況や地域課題を調査し、原子力に依存しない、安全・安心で持続的に発展可能な社会づくりを目指すため、より身近なエネルギーとして理解を深めるため探究活動を進めている。

(1) はじめに

再生可能エネルギー探究ゼミでは生徒12名が、5つのグループに分かれ探究活動を実践している。除染除去土壌から双葉郡の環境再生に取り組む『除去土壌班』、次世代の新エネルギー社会を考える『水素エネルギー班』、地域に流れる川や水路を利用し実験を行う『小水力発電班』、再エネの中での風力発電の現状を調べる『風力発電班』、二酸化炭素の排出量削減の視点から再エネ普及を目指す『CO₂削減班』。各班ごとに課題を設定し、地域再建するための再エネの役割について考えていく。

(2) 実施内容

① 除去土壌班

震災後から現在まで汚染された土壌がいたるところにたくさん保管されており、現在も除去作業は継続中である。それによって、保管場所の確保や管理のため多くの土地や人が必要となる。汚染土そのものを減少させるための方法の一つとして、除去土壌の再生利用というテーマがある。

このテーマで探究を始めようと考えたきっかけは双葉郡の飯館村長泥地区や富岡町にあるリプルン福島において、双葉郡の環境再生事業が実施され、そこでは汚染土壌に関する研究や外部から訪れた方への震災前、震災後、現在から未来についての情報提供の場を設けており、研修という形で様々な高校の生徒とディスカッションや学習が行われている。特に飯館村長泥地区では、環境省が環境再生事業等を行っていることを見学し、汚染土壌活用研究の最前線を見学させてもらい、新たな視点を得ることができた。また、福島高専の原田正光教授にご講演をいただき、より深く土壌利活用について見識を深めることができた。

【飯館村長泥地区の見学】



以上のことから、「除去土壌の再生利用」を探究のメインテーマとし、私たちができることを考えることとした。今後、並行して本格的に再生可能エネルギーの利用を目指し波力発電に関する研究を進め、具体的に発電構想を行いプロトタイプ発電モデルの製作に取り掛かりたい。

② 水素エネルギー班

FH2Rを見学したのをきっかけに、水素に興味を持ち「水素を知る・伝えること」を目的にしています。最終的には水素を活用した様々な機器について学び、水素によって動かすことのできる機器を製作したいと考えている。

本研究テーマは、CO₂排出ZEROを可能にできる「水素」をどのように活用し、普及させることができるのかに挑戦するプロジェクトである。水素を燃料にした「fuel cell」という燃料電池自動車のキットで、模型自動車を走らせたり、ソーラーパネルを使って純水を電気分解し水素を得る実験を行った。燃料電池で水素を使って酸素と結び付け、起電力が得られることを実験で証明でき、模型自動車を走らせることができたが、今後、実用的にするにはどうしたらいいかが課題である。

燃料電池の数を増やしてみることや、純水のタンクの大きさを変更することを実験で試したい。また、今後安定的に高い起電力を発生させるために燃料電池の構造を研究し、自作できるか、レンタルできるかなどを試行錯誤し前に進めていきたい。その後、水素のメリット、デメリットを伝える予定である。

【FH2R 見学の様子】



③ 小水力発電班

広野町は、駅からの登下校の道が、夕方暗くなり危ないと思っていた。地元の人たちはどう思っているのかをアンケートで確認したところ、88%の方

が同じような思いを持っていることがわかった。その現状を再生可能エネルギーの力で変えたいと考えた。ただ明かりをとすのではなく、広野町全体をイルミネーションで飾ることで、震災後人口減少で寂しい感じがする広野町の人々の心にも元気を届けたいと思った。実際に暗がりや比較的明かりの少ない地点を絞り込み具体的に計画を考えた。その計画を基に、役場の復興企画課に出向き、イルミネーションを設置する許可を得た。イルミネーション機器は学校にあるものを活用しようとしたが、数が足りないことが判明した。そこで、21世紀の森公園の冬場イルミネーションにおいて、公園をライトアップしている団体「NPO 法人いわきイルミネーションプロジェクトチーム」の手伝いをし、その流れで機材を貸していただけることになった。1月22日に実際に設置する予定までこぎつけることができた。

【イルミネーションの設置】



④ 風力発電班

浜辺に打ち上げられるゴミ問題、とくにプラスチックゴミについて関心を寄せていた。プラスチックゴミは海洋生物との関わりで広く世界から興味関心を引いている部分である。本校では二つある寮のうちの一つの名前が「海風寮（うみかぜりょう）」であり、身近な海を研究することで周囲の自然環境をよいものにできればと考えている。

地元の豊かな自然環境について考えていくという点で、風力発電にも注目をしている。福島県には大きな二つの山脈が南北に横たわり、山脈を吹きわたる風も多い。すでに郡山市の布引高原風力発電所（65980kW）や田村市のユース滝根小白井ウインドファーム（46000kW）などが設置されており、私たちの学校のすぐ北に位置する檜葉町では浮体式の洋上風力発電の実証実験が行われていたこともある。風力発電は、振動や騒音また環境の問題から建設が反対される場合があるが、雄大に羽が回転する様子や周囲の長閑な景観を併せて、前述の布引高原のように観光資源として利用している場合もある。

この班では、早稲田大学の永井准教授からアドバイスを頂き、住民にも受け入れられデザイン的にも優れ観光名所になるような風力発電について考えている。また、原子力災害により山林に入る事ができないところが多く、今後、山林が今以上に荒れたり、獣害も増加したりすると考えられる。風力発電の建設や観光化は、山林の有効活用にもつながると考えられ、住民と里山の機能を補助できるのではないかと考えている。

【道の駅なみえ見学】



⑤ CO2 削減班

再生可能エネルギーすべてに共通するのは CO2 を増やさないということである。CO2 増加は近年、地球温暖化や異常気象の原因と認識され、世界的に解決しなければならない課題とされている。この班では、発電することで CO2 を削減するものはないか、さまざまな発電方法の中でも CO2 が出ない発電は何かなどを考えている。また、私たちのどのような行動（例えばテイクアウトでお弁当を食べると、自宅で料理して食べるのとどちら）が CO2 削減につながるか、想定して計算してみる活動も行なっている。これらの想定した計算がまとまったら、わかりやすくまとめて校内に CO2 削減を呼びかけるポスターを設置し、啓蒙活動を行いたいとかがえている。本校では中学校があり、カフェも設置され外部から来た人も飲食することができるため、やり方によっては幅広くこの活動を知ってもらえるのではないかと考えている。

【FH2R 太陽光発電システム見学】



（4）課題と展望

これまで、各班において思うように探究活動が進まず、試行錯誤を繰り返している状況ではあるが、アンケート調査や地域の方々とコミュニケーションを取りながら活動している。まずは、中間発表に向けての課題解決アクションと、再度『現状』と『理想』を整理し、再生可能エネルギーがもつ本質的な役割を模索しながら、粘り強く探究活動を継続していきたい。

2. 2. 3 ④ アグリ・ビジネス探究ゼミ

アグリ・ビジネス探究ゼミの研究概要は、福島県の復興につなげる今後の農業とビジネスを探究することである。選択している生徒は、アカデミック系列1名、スペシャリスト系列【商業】1名の計2名（女子2名）と少人数である。本ゼミでは、2年次初めから2つのプロジェクトが進行している。コロナ禍の影響ではあるが、収束時期やオンライン等を活用し、自主的に能動的な活動が展開されてきた。

昨年度のゼミ生から、アグリという言葉が“agri：農業”だけでなく、“aggregation：集約する”、“ugly：醜さ”、“agree：承諾”といった意味のバトンを受け取ったことで、地元農産物を活用したマーケティングやエシカルの考えを取り入れ、グローバルな活動へとつながっていく。

(1) はじめに

探究活動でアグリ＝農業、ビジネス＝商業としてとらえた場合に、新学習指導要領における教科の目標を確認した。

【農業の目標】農業の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、農業や農業関連産業を通じ、地域や社会の健全で持続的な発展を担う職業人として必要な資質・能力を（次のとおり）育成することを旨とする。

【商業の目標】商業の各分野に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、ビジネスの意義や役割について理解させるとともに、ビジネスの諸活動を主体的、合理的に、かつ倫理観をもって行い、経済社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育てる。

本来であれば、基礎的・基本的な科目を学習してから探究活動が好ましいが、2年次からの専門教科の学習が始まるため、同時展開での探究となっている。

今後必要とされる教科の目的を達成するために、解説の内容を確認した。

このような知識と技術を習得させるためには、資格取得や競技会への挑戦など目標をもった意欲的な学習を通して知識と技術の定着を図るとともに、単に知識や技術を習得させることにとどまらず、知識と技術を活用する上で必要となる思考力、判断力、表現力等を育成すること、ビジネスの場面を想定した指導をすること、商業の学習と職業との関連について理解させることなどが大切である。とある。

それでは、アカデミック系列の生徒とスペシャリスト系列の生徒はどのようにして実践をしたのかを振り返ってみる。

(2) 実施内容

・共通テーマである化粧品、地元というキーワードから地元で化粧品を製造している工場に、生徒たちがアポイントメントを取り、見学している。

2021/10/13 RACE Co., Ltd 広野工場見学

事業内容：化粧品の製造販売・化粧品の卸売り



○アカデミック系列 生徒S

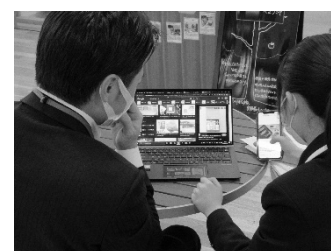
・テーマ「双葉郡新お土産 せっけんせっけん」
・設定理由（生徒原文） 最初、石けんをつくりたいと思うようになったのは、私がずっとフォローしていたハンドクラフトの YouTuber がコーヒークラスを使って石鹸を作った動画を見てからです。

一回目の石けん作りで失敗したことと私的にこれを



作っても私が考えた「福島の魅力を多くの人に伝えたい」というビジョンにちょっと物足りない感があったのでやめました。

けど、このアクションを私の発表に入れて、三戸さんに発表して、どうやら覚えてくれたらしくて、たまたま、いわきのトラフト企画さんがコーヒークラスを使った石けんを依頼しようと思ったところ、三戸さんが私の話をしてくださって、



「よかったら、ぜひ高校生の方と一緒に！！」と言ってくれました。

私の中では特産品である果物を石けんにしよという思いはありましたが、それだと調達の難しさと季節性で難しいと感じて、手が止まっていたところ、この話が出てきたので、すごく嬉

しかった！！

・この生徒は、他の教科よりも研修での学びを多く取り込んでいる。高校1年には、ドイツ研修(British Hills・徳島県上勝町「地域の現状と自分の探求についての紹介」、高校2年ハッピーロードネット主催(北海道・青森研修「原発廃棄物の再処理や最終処分場について」、広島研修、NY研修(British Hills: 国連関係とオンライン(予定)と、今後の研修内容と探究がクロスすることで、より深い活動が期待できる。

○スペシャリスト系列【商業】 生徒Y

・テーマ「美容で町おこしすることはできるのか？」
・設定理由(生徒原文) 美容を通して双葉郡に興味を持ってもらい、地元の人が双葉郡のいいところを自覚できる社会。私がこのプロジェクトを始めた理由は、少子高齢化・過疎化や双葉郡の魅力を知らないことが気になったからです。そのため、商業で学んだことを、自分が興味を持っている美容を組み合わせたいと思いました。双葉郡産の果物を使った化粧品を開発し、それを使って魅力を発信して双葉郡に興味を持ってもらえたらいいなと考えています。双葉郡の果物を使うことで風評被害の削減にもつながったらいいなと思いました。

・この生徒は、以下のような活動を取り入れ、先輩や中学生との共同活動を展開し、活動の幅を広げている。
高校3年 再生可能エネルギー探究ゼミのリモネン発電班が取り組んだ内容を必要として、協力依頼し協働で実験を行った。化粧品の工場見学の反省として、自分たちで化粧品の成分抽出が可能かを検証した。



2021/12/14 中学生への呼びかけ

成分抽出に必要なミカンの皮を調達するために、ミカンの実は給食で食べてもらい、皮の回収は食堂や給食時の



Zoom 放送で呼びかけを行った。



・広野町より無償でいただいたミカンの報告会の場で、抽出した液体を副町長へ説明する機会があった。その際に、広野町も地元の果物を使ったものをふるさと返礼品として模索していることを教えていただいた。



一つ一つの活動が、多くの人に結ばれて行き、未来への探究活動を照らす結果となった。

(3) 成果

活動から生み出された内容として、わらしべ長者のように、一つ一つの活動の価値を地域が認め、そこから生まれる新たなワクワク感を生徒たちが楽しんで取り組み、意欲へと変換されていった。問題を解決できる手段が、協働で実践されることで、生徒たちの探究テーマが地域に必要で価値あるものに育ってきていることがうかがえる。

(4) 課題と展望

次年度は、民法改正により高校3年生での契約履行が可能となることから、地域の資源を活用した商品開発、地域産業の振興方策の考案と提案、情報通信技術を活用した合理的なビジネスの推進など、実際のビジネスに即した体験的な学習活動が、よりリアルな探究への進化し、創造されていくことだろう。また、各科目において習得した知識や技術などを基に、日ごろから学校教育活動全体を通して、経済社会の発展に主体的に貢献する意欲を高めていくことだろう。

これらの活動が、他の学校の総合的な探究活動にも参考となることに期待する。

2. 2. 3 ⑤ スポーツと健康探究ゼミ

東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故から11年を迎えようとしている。この11年の間には、避難指示区域の解除や常磐自動車道とJR常磐線の全面開通、ふたば未来学園高校と小高産業技術高校の開校、J-villageの機能再開など、復興が進み明るい話題が増えてきた。震災や原発問題で受けた子どもたちの運動能力低下問題も、様々なプログラムが考えられるようになり、少しずつ回復傾向に向かっている。しかし、震災や原発問題の余波もいまだに残り、福島県民の生活に不安を残し続け、不自由な環境で生活を送っている人々もあり、時間が経過したことで忘れられようとしていることや新たな課題が生まれていることも事実。将来的な課題は続いている。さらに、今年度は新型コロナウイルス感染症が世界で拡大。私たちの生活する日本、福島県にも大きな影響をもたらし、震災からの復興を目指すスピード感にも鈍りを与えた。

「当たり前は当たり前ではない」。これは11年目に私たちが身をもって感じたことである。そして今、「ステイホーム」「新しい生活様式」「緊急事態宣言」「ソーシャルディスタンス」など、私たちはまたそれを感じる事態となっている。日常の一部であった「スポーツ」というものが、どれだけ多くの人に元気や勇気を与え、様々な課題を解決できる可能性を秘めたものであったのかを改めて感じることとなった。「する」「観る」「支える」「知る」。このような状況にある今だからこそ、世界や社会、地域、さらには自らの課題に目を向けて、どのような課題が蓄積されているのかを知り、スポーツを生かして世界や社会、地域、自身の課題解決を目指す。

(1) はじめに

スポーツを通して地域を豊かにする方策を探究する。総合型地域クラブによる地域活性化、健康の増進、子どものスポーツ環境の支援、スポーツビジネスによる持続可能で豊かな地域の実現やアスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行ってグローバルリーダーの育成を目指す。

(2) 実施内容

① 興味あるテーマに対する文献調査

高校1年次に決めた、各生徒のテーマに沿ってインターネットや図書館を使用した文献調査を行った。生徒が抱える小さな問いやテーマに関係する、人、施設、団体、専門家を切り口として、既に行われている取り組みや分かっていることの情報収集した。



② 地域のスポーツ振興を担う施設、団体の訪問

文献調査の後、地域のスポーツ振興を担う施設、団体を代表して、広野みかんクラブとナショナルトレーニングセンター Jヴィレッジを訪問、取材を行った。文献調査で分かったことと実際に活動している方から得た情報の同じ部分や異なる部分を通して、生徒が持つテーマをより多様な視点で向き合う時間を設けた。

③ グループ学習(調査・アクション)

文献調査や地域の実態、声を通して得た情報を基に、より深く調査する内容を探索し、生徒自身がどのようなアクションを通して、地域のスポーツ振興に寄与するかを検討した。実施する内容によって、個人で活動する生徒やグループで活動する生徒がいたが、生徒の主体性に任せ、グループ学習を行った。

広野 Revolution

「自分たちの得意なスポーツを使って貢献できる」ことを探して、活動を始めた。調査する中で、広野町が福島県の中でも運動力が低いことを知った。広野小学校の教頭先生と協議を重ね、小学校でスポーツイベントを開催し、小学生に運動する機会を届けた。



Easy Sports で not 苦手

「運動が苦手な人を減らすにはどのようにすればよいか」という疑問を基に活動を行った。高校2年生対象にスポーツに関するアンケート調査を行った結果、幼い頃からスポーツをやっているかがスポーツへの苦手意識に関係していることが分かった。その調査を基に、こども園に通う子どもが楽しめるスポーツを開発した。



コロナ禍でもスポーツ観客数を増やそう

新型コロナウイルス流行により、スポーツ観戦ができなくなった経験を基に、「コロナ禍でもスポーツ観戦ができるようにしたい」と考え、活動を始めた。いわきFCの試合ボランティアを行うことや、VRでのスポーツ体験を通して、多様なスポーツ観戦の実現により、スポーツ観客数を増やせることが分かった。現在、ふたば未来学園のバドミントン部と協働してVRコンテンツを作成し、学校内での活動の応援が活性化することを目指して活動している。



バドミントンで地域活性化

広野みかんクラブで開かれているバドミントン教室の参加者増加を目指して、活動を始めた。バドミントン部所属の生徒が、持っているスキルを活かし、地域に対してできることとして、バドミントン教室を選んだ。週1回、バドミントン教室を手伝い、小学生が楽しんでバドミントンができる環境を模索している。



スポーツを通して町をきれいにしよう

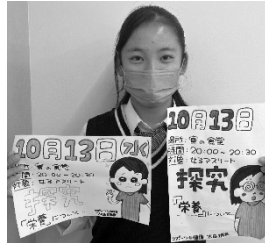
広野町にポイ捨てのゴミが多くあることに問題意識を持ち、活動をはじめた。日本で普及しているスポーツ GOMI 拾いを通して、広野町をきれいにすることを目指した。実際にイベントを開催した中で、きれいにすることよりも参加者がゴミに対する意識の変化が起きること



に気づいた。より多くの人に意識の変化を起こしてもらうために、小学校や地域でのスポーツ GOMI 拾いイベントの実施を計画している。また、広野町生涯学習発表会やFMいわきで活動の報告を行った。

アスリートに必要な栄養を少量で効率的に摂る方法とは

「少食なアスリートが無理せず栄養を摂取できるようにしたい」と考え、活動を始めた。株式会社明治の方とオンラインでヒアリングを行い、現在のプロテインやゼリーの現状を知ることができた。これま



での調査を基に栄養指導をふたば未来学園のアスリート生徒に行う予定だったが、コロナウイルス感染拡大により残念ながら中止となった。

(3) 成果

スポーツと健康探究ゼミに所属する生徒は、トップアスリート系列として日頃からスポーツや運動に親しんでいる場合が多い。しかし、スポーツの4観点(する、見る、支える、知る)で見ると常に「する」立場にいる。このことは、チームメンバー以外に交流することがないことを意味する。なぜなら、スポーツを極めるにはそれ以上の関わりが必要ないからである。しかし、未来創造探究は、地域の課題に焦点をあて、自らのやりたいことと重なる課題を解決するために活動する。すなわち、学校外の人と交流しながら、地域の人のために活動をするのである。自らの能力やチームのレベルをあげる

ことだけ考えればよかったのに対して、未来創造探究は自分以外の人たちのことを考え続けることが要求される。最初の時点では、生徒は地域の方に取材をしたり、協働することに対して、緊張していたり、積極的な姿勢を示さなかった。だが、地域の方との接点が増える、実際に生徒によって何かを提供できたことなどによって生徒が主体的に動き始めることがあった。様々な理由が考えられるが、「私でも、誰かになにかができる」ということを経験から気づくことができたからではないかと考えている。

スポーツはいつか、手段になる。お金を稼ぐためかもしれない、子どもに何かを教えるため、誰かを支えるためかもしれない。スポーツを超えて、だれに何をなしたいのか、簡単ではないが、生徒が少しずつ考え、生徒自身の思いを形に行ってもらいたい、そしてそのスタートを今年の1年で作れたのではないかと。

(4) 課題と展望

本ゼミに所属する生徒の多くは、各部活動の試合や練習日程などによりフィールドワークや各種の体験会などにグループ全員で参加することが難しい場合がある。長期休業中も同様であり、探究活動と部活動のバランスがうまく取れない状況がある。授業時間をうまく活用し、より多くのアクションを起こしていくには、情報共有や機会提供の面でより工夫が必要だ。個別活動が、2人以上のグループになることに対して、策を講じる必要があると考える。スポーツと健康ゼミは8割以上の確率でグループを作る。興味関心が同じである場合は、グループ活動をしていてもよいが、自らの興味関心に向き合いきれていない生徒がいることも分かった。グループになることで、プロジェクトは前に進みやすくなる。しかし、生徒のやりたいことや興味関心に寄り添うことは忘れてはならず、生徒が主体的に行動できるような状態を作る必要はあるのではないかと。また、トップアスリート系列の生徒は、各生徒が行うスポーツ以外に興味関心が薄い傾向があり、地域に目を向けることには多くの人的サポートを必要とする。しかし、現時点では、生徒数に見合った教員を配置できていないと感じる。教員側のスキル面もあるかもしれないが、地域と向き合う経験が比較的少ない生徒に対して、よりよいサポートができる体制を構築できることを望む。

探究活動は何のために行うのか。プロアスリートになれるのはほんの一部の選手のみであり、必ず引退も訪れる。いわゆる「セカンドキャリア」である。高校生のうちからスポーツの4観点到に触れ、様々な角度からスポーツを探究していくことは今後の人生に必ず生きてくるはずである。選手を続けている期間でも、探究で学んできたことで視野が広がり、様々な気づきに繋がっていくと思う。次年度は今年度を生かした大きなアクションを起こす年。単発的なアクションではなく、持続可能なアクションを起こし、周囲を驚かせる結果を求めたい。

2. 2. 3 ⑥ 健康と福祉探究ゼミ

本ゼミは、少子高齢化や人口減少が加速する地域における、住民が安心して暮らすことができる町づくりを目標として活動している。高齢者への生活支援、健康づくりや介護予防対策の充実、地域住民の交流の場の設定など、医療・介護・福祉が結びついた包括ケア、地域の高齢者から子どもまで様々な年代の共助による生きがいのある生活の創造を目指し探究と実践を行っている。

今年度本ゼミに所属しているのは、アカデミック系列生徒4名、スペシャリスト系列生徒7名（農業1名、福祉6名）の計11名であり、「健康」や「福祉」分野に興味のある生徒や、高校卒業後の進路に福祉系・看護系・栄養系を考えている生徒が多い。自らの関心のある事柄と「健康」や「福祉」の分野を関連させ、地域の課題解決に向けて、個人あるいはグループで探究活動を行っている。

(1) はじめに

年度初めにゼミを決定した時点で、生徒たちは今後取り組みたいと思っているテーマを仮にはあるが設定していた。しかし、興味関心のある事柄について挙げていだけで、具体的にどのような活動をしたいか述べる事ができる生徒はほとんどおらず、福祉・健康についての知識も不足していることが分かった。そのため、まずはゼミ全体で福祉・健康分野の知識をインプットし、今後の探究活動のヒントをつかむ機会を設けてから、個人の調査活動や実践活動に移行させることとした。

(2) 実施内容

①今年度の流れ

「福祉」「健康」「栄養」についてのインプット学習（5月～7月）

・福祉科教員による講義・演習（5月）

本校福祉科教員による講義とボッチャ体験を通して、福祉分野や障がいについての知識を深めることができた。パラスポーツを実際に体験することによって、障がいに応じて様々な工夫がされていることや、障がいを持っている方だけでなく幅広い年代の人が共に楽しめることに気づき、自分の探究活動で活用したいという生徒も見られた。



ボッチャ体験

・大学教授によるオンライン講義（6月）

東京家政学院大学運動生態学研究室の江川賢一先生か

ら、「ヘルスプロモーション」をテーマにオンライン講義をしていただいた。広野町、福島県、日本、アジア、世界全体の健康や運動に関する現状をデータと共に解説していただき、専門的知識を得ることができた。また、生徒は質疑応答を通して、探究活動への具体的なアドバイスをいただくことができた。



・栄養教諭による講義（6月）

本校併設中学校の栄養教諭である水口公美先生を招き、「健康」「栄養」について講義をしていただいた。調理面、栄養面についてだけでなく、人が集まり共に食事することで生まれるコミュニケーションや、食事を通じた他者理解や地域理解にも言及していただき、「食」が様々な分野とつながっていると気付かせることができた。



・ゼミ内発表会（8月）

夏季休業中に各自のテーマと関連する事項について調査を行わせ、その内容をゼミ内で発表させた。教員やカタリバスタッフ、同じゼミの生徒にアドバイスをもらい、課題解決のための活動に生かす機会とした。

②探究活動内容

・地域リング

地域における子ども、高齢者、障がい者の交流を増やすことを目標に、公共施設での子育て世代に対するアンケート調査や、パラスポーツを取り入れたイベント等を実施した。



ボッチャや脳トレを取り入れたイベント

・「介護」について知ろう

多くの人に介護に興味を持ってもらうことを目標に、特別養護老人ホーム施設長様へのインタビュー、アンケート調査、介護体験イベントの企画等を行った。



特別養護老人ホームでのインタビュー

・LGBTを知ろう

LGBTへの理解を広めることを目標に、校内で中学生・高校生を対象としたLGBTへの意識等についてのアンケート調査を実施し、結果を分析した。

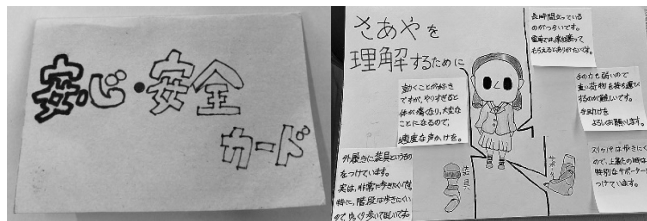
・交流で心もからだも元気に

震災前より地域での世代間交流が減少したという地元の方の話から、世代間交流を増やし高齢者の健康を守ることを活動の目標とした。高齢者へのインタビュー、様々な世代が共に楽しめるイベントの企画等を行った。

・災害弱者の避難について

災害時に障がい者や高齢者が避難から取り残されないことを目標に、アンケート調査、支援学校教員へのイ

ンタビュー等の様々な調査活動を行った。障がい者自身とその周囲の方が災害時に活用できる「避難マニュアル」の普及を目指し、試作している。



避難マニュアルの試作品

・中高生に正しい食習慣を身に付けさせる

福島のメタボ率が全国ワースト4位であり、肥満の要因となる食行動をしていることに着目し、若い世代に正しい食習慣を身に付けてもらうことを活動の目標とした。本校の中学生・高校生全員を対象とした大規模なアンケート調査を実施し、食生活の傾向を分析した。

・DANCEでたくさんのスマイルを

コロナ禍で増加したストレスをダンスによって軽減させることを目標に活動している。ストレスの状況、ダンスへの興味関心についてのアンケート調査を実施し、結果を基に中高生を対象としたダンスイベントを企画した。

・幼児と音楽・幼児と運動

音楽と運動を通して子どもたちの笑顔を増やすことを目標に、こども園の職員の方へのインタビュー、アンケート調査、音楽と運動を組み合わせたイベントの企画等を行った。

(3) 成果

ゼミ活動の早期に「福祉」「健康」「栄養」分野について、講師の方々から最新の知見を得られたことは、その後の探究活動を進める上での大きな推進力となった。

また活動を通して、様々な年代や職業の方と交流し、多様な価値観に触れる事ができたことは、大きな財産である。最初は外部の方に連絡をとることに抵抗感を示していた生徒が、連絡をとった相手から、関連する人を次々と紹介してもらえるとという体験を経て、積極的に人とのつながりを持つ姿勢も見ることができた。

(4) 課題と展望

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、時間をかけて準備してきたイベントが直前で中止となる等、対面での探究活動が思うように進められず、落胆している生徒も多い。しかし、オンラインの活用等、今だからこそ有効に働く手段を考える良い機会と捉え、課題解決のための実践を進めさせたい。

2. 2. 4 探究活動整理のための発表会

10月27日に2年次の探究のプレ発表会を行った。目的は以下の4つである。①これまでの活動を通しての学びや今後の課題を振り返り、発表という形で表現することにより、他の班の探究班の生徒たちと共有し、探究活動の意識の高揚を図ること、②探究テーマ（問い）を明らかにした先にある、自らが考える「地域・社会のあるべき姿」と課題解決に向けて実践したアクションや、構想中のアイデアを報告する、③地域の方から意見やアドバイスを受けることにより、今後の実践を具体的に落とし込む機会や個別に地域の方から協力を得る足がかりとすること。④まとめの段階に入っている3年次生や教員からの意見やアドバイスを受けることにより探究ゼミの縦のつながりを強くする機会とすること。地域のアドバイザーとしては、以下の方々にお越しいただいた。

氏名	所属	地域	関連領域
和田 智行	小高ワーカーズベース	南相馬	原子力
石井 修一	絵本の石川屋	田村氏	原子力
小波津 龍平	クムト	南相馬	メディア
平山 勉	双葉郡未来会議 代表	富岡	メディア
小沢 晴司	宮城大学 教授	広野	再エネ
佐藤 亜紀	HAMADOORI 13 事務局	大熊	アグリ
猪狩 僚	igoku 編集長 いわき市役所	いわき	メディア、福祉
大和田 幸弘	NPO 法人みかんクラブ 事務局長	広野	スポーツ
半澤 悠司	NPO 法人みかんクラブ	広野	スポーツ

(1) 発表準備

課題設定やプロジェクト内容について、印象や思い込みではなく、データや根拠に基づいて設定されているか生徒に気をつけさせた。また、それを受けて、どのような調査／資源（調査源、外部協力者）があれば、探究活動をより深化させることができるか考察させた。今回は生徒の発表回数を増やし、より多くのアドバイスを受けられるようにした。

発表の項目として以下の7つの点を示した。

- ①探究テーマ、そこに至った経緯
- ②どんなアクションをしてきたか
(調査のためのアクション、課題解決のためのアクション)
- ③自分が考える「地域・社会のあるべき姿」
- ④アクションする前後でわかったこと、気づいたこと、学んだこと、新たな仮説
- ⑤自分の考え方や姿勢にどのような変化があったか
- ⑥今後の「課題解決のためのアクション」の内容、計画
- ⑦現在の悩み、壁、相談したいこと

(2) 実施内容

発表件数は原子力防災ゼミ 19 件、メディアコミュニケーションゼミ 20 件、再生可能エネルギーゼミ 5 件、ア

グリビジネスゼミ 2 件、スポーツと健康ゼミ 18 件、健康と福祉ゼミ 10 件。合計 74 件となった。

発表者をプロジェクト内容に基づきゼミを横断して 12 会場（A～L グループ、1 グループにつき 6 プロジェクト）に分け、発表を行った。1 プロジェクトの発表につき 12 分の時間を取った（発表 5 分、ディスカッション 5 分 移動 2 分）。



(発表の様子)

(3) 成果

発表会が探究のマイルストーンとなり、生徒の刺激となったとともに、アドバイスによって探究のブラッシュアップがされた。また早稲田大学の山田研究員および永井祐二先生に発表資料を見てもらい提供し、プロジェクトに関係する外部協力者を紹介いただけた。

2. 3 未来創造探究（3年次）

総合的な学習の時間の中で、3単位を未来創造探究として実施した。そのうち1時間は主として自らを見つめ、進路実現のための時間として、残りの2時間を探究活動として実施した。2年次に引き続き、3年次においても6つの探究ゼミに分かれ、グループや個人でテーマを設定し、実践を行った。昨年までと比して、グループでの探究より個人探究が増え、その結果プロジェクト数も増加した。



2. 3. 1 未来創造探究の概要（3年次）

(1) 3年次の探究活動概要

- 4月21日 中間発表
- 5月～9月 各班、グループに分かれて探究活動
- 9月25日 未来創造探究生徒研究発表会
- 10月～1月 論文作成

(2) 実施内容

① 中間発表

今年度の中間発表は3年次の4月に行った。

発表会に新2年次を招いたことにより、2年次がこれから取り組む未来創造探究のイメージがつきやすくなったとともに、新たに赴任して探究担当となった教員にとっても、概要を伝えられるようになった。

また、3組のゼミ混合プロジェクトが見られた。

② 探究活動

6つのゼミに分かれて探究活動を行った。各ゼミの構成は以下のとおりである。

探究ゼミ	生徒人数	教員人数
原子力防災	19	4
メディア・コミュニケーション	34	4
再生可能エネルギー	12	3
アグリ・ビジネス	9	2
スポーツと健康	29	5
健康と福祉	15	3

③ 未来創造探究発表会

「未来創造探究」の集大成の場として「未来創造探究生徒研究発表会」を開催した。各分野の第一線で活躍されている方（専門知を持つ方）、地域の課題に取り組んでいる方（地域知を持つ方）を審査員兼コメンテーターとして呼び出し、各賞を設定した。

今年度は中学3年生も発表を行うことに加え、高校3年次のプロジェクト数が58PJと前年より増加したため、全PJを発表会当日に発表させることが時間的に不可能となった。そのため事前に発表動画を撮影・提出させ、各ゼミの選考および企画研究開発部による審査によって高校32PJを発表会当日の分科会に進出とした。

分科会発表ののち、専門知審査員の8名の先生方からミニ講義を頂いた。講義内容を書き起こしたものを右のリンク先に掲載する。

審査員の菅波香織さんからは「現状の把握ということでアンケートなどを行ったようだが、発表で見えてこなかった」、とご指摘を頂き、最後に「今日の探究のあとも、対話で未来を作ることを考えていただければ」というお言葉をいただいた。

④ 論文作成

発表会以降、探究内容を論文の形でまとめる活動を行った。分量を1万字以内とし、年次主任製作の論文ループリック（「関係資料」に掲載）のもと探究活動を文章でまとめを行ったが、行った活動や得られた知見を概念化し言葉にすることに生徒は苦勞していた。12月中旬を一次締め切り、訂正を経て1月下旬を最終締め切りと定めた。

(3) 評価と課題

感染症の影響による大きな制約の中でも、多くの生徒が地域や実社会の課題を「他人事」ではなく「我がこと」として捉え、主体的に探究に取り組むふたば未来学園の探究文化を堅持し、出来ることを模索し挑戦することができた。また、調査研究に留まらず実践に踏み出し、地域で新たな価値を創造した事例や、探究を通じて自身の生き方を見出し、進路へと向かう姿勢は高く評価できる。

課題設定、調査やデータ、考察の言及が少なく、「探究報告」ではなく「活動報告」の発表に見受けられた点が課題である。「やってみた」だけでは探究とはならない。自身の実践を、書籍や教科から得た知識と結び付け、抽象化して全国・世界の課題とも重ね合わせて考察を行い、地域や社会を揺り動かす新たな知の創出や、未来に向けた提言へと至った活動は少なかった。

また、地域の方を「高齢者」等でくくり抽象的なステレオタイプで捉えている発表が見受けられた。具体的な一人一人と向き合って問題を発見したり、解決策を見出したりしていくことが必要である。